“СВОБОДНАЯ РОССИЯ”

自由ロシア

No. 111

一九八三年九月

目次

ソ連長老の議定書 ①……グリゴリー・クリモフ……1

第一章 生命の水……1

第二章 暗闇の王……11

ラスプーチンとユダヤ人
—ラスプーチンの個人秘書の回想録— ⑫……ア・シマノウィッチ……26

ロシア東方侵略史 ㉑……ア・ロストフスキー……36

◇（ソ連だより）……43

表紙は……モスクワ・軍事アカデミー時代のクリモフ
カットは……井上清彦

ソ連長老の議定書

グリゴリー・クリモフ

プロトコール　第一章

生命の水

それは知恵が多ければ悩みが多く、
知恵を増す者は憂いを増すからである。

（伝道の書一―一八）

かつてモスクワには赤い教授団研究所があった。そこでは未来の世界革命のため、赤い指導者たちを養成していた。われわれはすべてのブルジョアを打倒するため、世界的な火災を煽動するという原則に基づいていた。しかるに一九三〇年代の大粛清時代にこれらの赤い指導者の大半は、彼らの教授たちと一緒に、狂犬とレッテルを貼られて、銃殺されてしまい、研究所は閉鎖された。

ところが現在では、ソ連の党、政府の最高幹部たちは、ある新しい機関で教育されている。この機関は、厳秘とされており、これに関してはモスクワの上層部でも、あり得ないというような噂が流れている。

この機関は公式にはソ連科学アカデミー付属高等社会学研究所と名付けられていた。しかしそこで講義をしていたのは、極秘にされている科学調査研究所の教授と、それよりさらに極秘

にされているKGB第十三総局の将軍たちであった。モスクワではこれについて、これはソ連の最高異端審問所だと囁かれていた。

結局、元の赤い教授団研究所になぞらえて、学生たちはこの組織を〝黒い教授団の研究所〟と非公式に改名し、高等社会学はこれを〝黒い社会学〟と呼び、この社会学に関する自分の註解書を『ソ連長老のプロトコール』と命名した。

授業開始の前に二人の新しい学生は腰をかけて、愚痴をこぼし合っていた。

「おやおや、この齢になってまたぞろ勉強だ——原子力空軍将軍ニコライ・ステパノウィッチ・ボロジンはぼやいている——ひどい厳重さだよ、調査は。昔はアンケート調査だったが今度は血液も検査している。」「そうだ——原子力潜水艦隊提督フェオドール・サハロウィッチ・カリュージヌイは顔をしかめた——梅毒検査をする時だって、血液は試験管に一個しかとらない。だのに私から十個も採血した。十回検査したわけだ。それに私の親類全部から血を採った。子供たちからもだ。」

「私なんか、もうあの世に逝った人たちにまでもつきまとった。——将軍は言った——私には祖父ニカンドルがいた。鍛冶屋をしてたんだ。そりゃロシア風にいつもひどく酔払っていたのさ。それで彼らはこの祖父のことで私に何やかやとしつこく尋問するのだ。何が原因で、彼は酔払っていたのか、何故、そして何のためか？って」

「私には叔父がいた。——提督は言う——革命の真の英雄だった。彼は殺されるまで、戦った。ところがこの叔父にもつきまとった。何が原因で、何故、何のために？　かってマクシム・ゴーリキーが書いている。『勇者の無鉄砲をわれわれは誉めたたえるのだ』。今では政治はどこか変ってしまった。それもひどく変った。私はじりじりして怒った。私の叔父は単なる阿呆だったのさと怒鳴った時、はじめて彼らは私にまといつくのをやめた。」

「総じて、生きている限り学べ、でないと馬鹿になって死んじまうとさ」と将軍は結論した。

＊　＊　＊

講堂には、党中央委員会の指導者、最高会議議員、大臣、外交官、ソ連の将軍、提督が勉強机の前に坐っていた。

最初の講義をしたのは、科学調査研究所第十三部の社会科学博士マリーニン教授である。彼はKGB第十三総局の陸軍少将を兼任している。マリーニン教授は、自分は率直にいって、闇の任務の教授であり、その姓は甘いが仕事は辛いと、手短かに自己紹介した。そしてここに出席している人々は、皆がソ連政府の指導者では決してなく、一種の選ばれた人々だけであると強調した。ついで闇の任務の教授は、問題に話を移した。

「同志諸君、まず最初にわれわれの授業の理由と目的を諸君に知って貰いたい。根本的理由は、今われわれは原子力時代に生活しているという事実である。このことが、国家指導者に対

して特別な責任を負荷させている。そしてこのために、諸君は世界の運命を支配している若干の特殊法則を知らなければならないのである。しかしこの法則はかなり複雑で、錯綜しており、少々秘密めいている。原理としては、これはかって神並びに悪魔と名付けられたそのものである。

諸君のうちの二、三の人が微笑しているのが私には見える。よろしい。具体的例をあげよう。謎が一杯ある。諸君のうち大勢の方は第二十回党大会に参加している。そこではいわゆるスターリンの個人崇拝が審議され、さらにスターリンの死後の王権剝奪が行われた。これに関連して、諸君のうちの多くは、今日に至るまで若干の原理的問題で苦しんでいることと、私は思っている。例えば、スターリンは、あらゆる時代、あらゆる民族の最大の天才から、どうして、あらゆる時代、あらゆる民族の最大の犯罪者に一変してしまったのか？　どうしてあらゆる科学の巨匠、大将軍、諸民族の父、世界解放運動の指導者から、スターリンは突然流血の専制者、精神異常の偏執狂、歴史の偽造者にいきなり一変したのか？　そしてもしこれが単なる創作にすぎぬものなら、スターリンの王権剝奪も恒例の歴史の偽造ではないのか？

問題はあまりに多く山積している。例えば、現在でもスターリン主義の犠牲者の死後の復権をどうしたらよいか、われわれは、あまり自信がない。誰を復権し、誰をしないのか？　トロツキーとトロッキストに関してはどうか？　しかしこのためには、なぜ皆こんなことになったかを、知る必要がある。一九三〇年代の有名なモスクワ裁判の時代に、十月革命のほとんどすべての指導者が、なぜ狂犬として銃殺されてしまったのか？　功績のあるかっての政治犯、自由を愛し、人間を愛する人々がどうして再びシベリアに放逐されたのか？　なぜ大粛清の時代に赤軍のほとんどすべての上層部が清算されたのか？　この悪業は何なのか？

過去の誤謬を修正するため、われわれはスターリンから王権を剝奪し、強制収容所の大半を解散し、人々により多くの自由を与えた。そしてどんな結果となったか？　結局、たちまちソ連に新しい反乱者が再び現れた。いわゆる反体制派、不同意者、異端思想家たちだ。そして彼らを再び牢獄に入れたり、特殊精神病院、神経病療養所、精神病院に収容しなければならなくなった。ちなみにこれは秘密だが、精神病院はわれわれの特別プロジェクト《ゴーレム》だ**（訳註、ゴーレムはユダヤのラビがつくった人間ロボットのことである）**。

ところがこの際、一つの奇妙なことが、すぐに目につく。われわれが精神病院に収容するこれらの新しい革命家たちはほとんど皆、スターリンが人民の敵として清算した古い革命家と親類関係を持っていることだ。これらの精神病院患者はしばしば、元人民の敵の子供か、親類である。総体的にいって何かしら永久的な反乱者、永久革命家といった者が現れている。

さてスターリンの粛清の奇妙な特徴を想い出して見たまえ。

当時は家族全部が逮捕され、妻は夫の責任を負い、子供は両親の責任を負うという有様だった。当時は、諸君には、これは極端な不公正だと思われていた。ところが今となると、諸君のうちのあるものは、スターリンはひょっとすると自分なりに正しかったのではないか？　古い革命家スターリンは、諸君が知らない若干の秘密を知っていたのではないかと、反省している。

そして今一つ謎がある。これらの反体制派、不同意者、異端思想家たちは、多少なりともユダヤと関係を持っていることである。原則として、これはユダヤ人か、ユダヤ人との雑婚か、この結婚によって生れた1／2ユダヤ人である。サハロフとソルジェニーツィンを含めてのことだ。

ユダヤの反体制運動と精神病院と併行して、われわれは今ソ連からのユダヤ人亡命を開始している。しかしこれは一体何なのか？　被割礼者たちの反乱なのか、あるいは割礼された反乱なのか？　秘密の話だが、ユダヤ人の亡命は、われわれの特殊プロジェクト《アガスフェル》あるいは《永遠のジュー》である。**（訳註、旧約聖書の「出エジプト記」は虚構でユダヤ人が追放されたという見解から、ユダヤ人の亡命ではなく、追放だという意味のプロジェクトである）。**

全般的に見てある種の聖書的法則が現れている。すべてこれを理解するためには、反キリストの理論を知らなければならぬ。これについては、諸君に後述する。世界には色々な謎が多い。さてわれわれもこれらの謎を解明して見よう。」

将官教授は講堂を見渡し、自分の幅広く密生している頬鬚を撫でた。

「同志諸君、われわれは聖書の善と悪、正気と狂気、生と死、の知恵の鍵、幸と不幸の鍵を諸君に与える。しかしこれらの鍵は有毒の鍵であり、したがってその取扱いは慎重でなくてはならない。このことに、留意したまえ、これが原因でわれわれには、すでに殺人と自殺者が出ている。そこで諸君のうち誰か自分の姑を銃で殺したくなったりしたら、まずもってわれわれに相談してくれたまえ。

さらにここでこれから話すことは、極秘の国家機密である。だからこの建物から一切教材を持ち出してはならない。諸君の特殊の個人的場所であるこの教室に残しておくこと。これから諸君に対して行われる講義は《高等社会学短期コース》と名付ける。」

若干の学生は軽く顔をしかめた。将官教授は嘲笑を浮かべた。

「諸君がかって共産主義のバイブルとして学んだが、今となっては歴史の偽造とわかった《党史短期コース》などとは、これは何の関係も持っていない。

それでなぜわれわれはこのコースを高等社会学と名付けたのか？　それはわれわれが諸君に、カール・マルクス、レーニン、スターリン、ヒトラー、ピョートル大帝、イワン雷帝、ロベスピェール、ナポレオン、フリードリッヒ大王、ジョージ・ワシントン、ユリウス・シーザー、アレクサンドル大帝、ネロ、カ

リグラに等しく関係のある社会学のいくつかの法則を、これから解明するからである。

同志諸君、諸君は、歴史が偉人をつくるのか、それとも偉人が歴史をつくるのかという論議を知っている。私が今諸君に名前をあげた人々は、疑いもなく、歴史上大きな役割を演じている。この偉人の多くが偉人になったのは、基本的に、シーザー、ナポレオン、ヒトラーのように、彼らが大戦争を起したからである。またロベスピエール、ワシントン、レーニンのように、大革命を起したからである。このように諸君はほとんどすべての戦争と革命の内部機構を知ることができる。

同時に、なぜ諸君の隣りの主婦がいつも亭主と戦争をしているのか、またどうしてある家族では永久革命があるのかを、諸君は知ることができるのである。

この高等社会学は中等学校の高学年クラスの必須課目にいれたらよいと、私は個人的に考えているのだが、この課目に関する教科書は、残念ながら世界中どこを探しても見当らない。ところで、もしひょっとして誰かがこんな教科書を書いていたら、スターリン時代だったら、その著者は銃殺され、ヒトラー時代だったら絞首刑に処せられたろうし、ナポレオン時代だったらさしずめギロチンにかけられていただろう。民主主義国でなら彼を狂人だと公表するかも知れない。一面、これは2プラス2＝4という簡単なものであるが、他面、私自身諸君にとても全部話すことはできないのである。このことを告白しておかなければならない。

党中央委員会委員、大臣、将軍は自分の勉強机の上で、興味深く身動きをしはじめた。

「しかし最初の間は、諸君は多少退屈しなくてはならない。——マリーニン教授は言う——スターリンの個人崇拝をも含めて、すべてこれを理解するためには、われわれは一般的にいって、宗教的崇拝の発生史すなわち石器時代からはじめなければならぬ。

石器時代の人々はまだ火を知らない。洞穴に住み、獣皮をまとい、太陽と共に眠り、太陽と共に起床していた。彼らの狩猟と彼らが食べていた草根は、太陽に依存していた。四季、暖寒、食料と飢餓、結局彼らの生死は、太陽に依存していた。そこで石器時代の人々は、実践によって、太陽が彼らの生活のもっとも主要なものであることを悟り、太陽を神として崇拝しはじめた。こうして人間の最初の宗教、太陽崇拝が生れた。このもっとも簡単な例で、諸君は原理的に宗教と神が何であるかがわかる。これは、人間が当該歴史段階で自分にとってもっとも重要であると考える、その自然力に対する礼拝である。

次に原始人が火を知る時代が到来した。最初の火はおそらく空から稲妻となってやって来た。森林火災が発生した。人々は燃えさしを拾って、洞穴の中に持って行き、篝り火を起した。火は彼らを暖めはじめて、野獣から保護して、彼らに奉仕した。それから彼らは火で食事を料理した。しかしまだ摩擦によって

火をおこすことはできなかった。したがって永久に火を保持しなければならず、このために昼夜を分たず火の番をする特別の当直を任命しなくてはならなかった。火は徐々に彼らの生活の中で重要な自然現象となった。これまではそれは太陽であった。こうした拝火教の崇拝が発生し、篝り火の番をしていた当直は、神官すなわち火の守護者へと変っていった。

さてもっと文化的な崇拝について見よう」。——

教授は言って、自分の助手の方に顎をしゃくって見せた。静かに黒いカーテンが窓の上に下りてきた。教授の背後に白いスクリーンが現れ、後から映写機の光が流れてきた。最初の一日は、教授は映画の助けをかりて古代エジプト、フェニキァ、アッシリア、バビロニアの宗教的崇拝を解説した。その翌日はペルシャ、インド、古代ギリシャ、古代ローマに移った。それから教授はこう総括した。

「古代の宗教的崇拝の一般的発達傾向を分析する時、ここに汎神論、多神論の色々な形態、すなわち色々な自然力、特に人間にまだ未知のしたがって神秘的な自然力の神化を見ることができる。

さて一つの特殊なデータに注目したまえ。若干の古代文明の中で、特にその文明の没落期には、宗教思想は性問題に集中しはじめている。いわゆる男根崇拝が現れ、男性の性器の石像が神化と崇拝の対象となる。単に性だけでなく、人々の生殖の祭り、特殊の神殿、奇妙な儀式、奇妙な男女の神官が発生し、何らかの性の対象を崇拝する。時には、われわれの見地からすれば、性の病的対象にまで及ぶ。これらの文明の滅亡には外面的歴史だけでなく、内面的生物学も参加していることを考慮すれば、これは不思議ではない。これに加えて、これらの民族はある程度、生物学的にも自然に退化し、死滅しつつあったのである。ところがこの人々が、彼らにとって新しい、神秘な自然法則に考えつきはじめた。その結果、現れたのが男根崇拝である。

この過程の軌跡はあらゆる時代、民族の歴史の中に発見できる。例えば、インドには次のような宗教的伝説がある。ある時、世界に黒いデモンが現れた。彼は出産を阻止することによって、一切の生物を抹殺しようと思った。デモンは男女や動物の雌雄に無関心乃至は相互嫌悪の情を暗示した。出産の車輪、生命の車輪は停止した。春になっても、鳥は巣作りをやめ、雌の虎は虎の子を生まず、人々の世界では子供の笑い声も聞けなくなってしまった。その時、すべての女性、動物の雌は自然の法則の守護神、女神カーリのところにやって来て、懇願しはじめた。『私たちに子供を返して下さい。世界に若さを返して下さい』。女神カーリは彼らの願いを聞き入れて。悪いデモンを滅ぼした。そして生命の輪は再び動きはじめた。

勿論、全種族、民族の退化と死滅は、相対的にしか言えない。それは当該種族が死滅しはじめ、弱化すると、即刻もっと若くて強い隣りの民族の波がその民族の中に突入して来て、歴史の

輪はその運動を続ける。しかしそれはすでに新しい形態となっている。

このように古代ギリシャは内部から腐敗し崩壊した。古代ギリシャのどの展示品を見ても、ほとんど鼻翼のない真っ直ぐの鼻をしている有名なギリシャ人のプロフィールを見ることができる。ところが現代ギリシャ人は、もう古代ギリシャ人よりも小アジアの隣人に多く似ている。このように野蛮人の打撃でローマ帝国も崩壊した。これが自然の生物学的均衡法則である。」

放課後学生たちは印象を交換し合っていた。原子力空軍将軍ボロジンは不満気に呟いた。

「スターリンの個人崇拝を説明すると約束していたのに、失礼、男根の話になってしまった。私はこんな言葉は知りもしなかった。」

＊　＊　＊

異教の崇拝を終って、キリスト教史に移った。この講義はトプツィギン教授がした。国家保安部将軍の制服を着て、幅広く密生した頬鬚の大男である。教材として学生たちは『聖書の歴史』を貰った。

「これは聖書の現代語訳である――教授は説明した。――これは英語からの逐語訳であることに注意したまえ。昨今歴史はすべて偽造された。したがってその後においては諸君は、何も、誰も、それはわれわれまでも含めて信じないという権利を持っている。こうした考えから出発して、われわれのプログラムでは、原則的に、中立的つまり外国の原典に、われわれは依拠することにする。

歴史的発展過程では、死滅する文明に代って野蛮人が登場することを、諸君は知っている。マルクス主義理論によれば資本主義に代って共産主義が到来する。そこでカール・マルクスを信じれば、同志諸君、われわれは歴史的見地からすればその野蛮人に他ならぬ。ちなみに、ラテン語で『野蛮人（バーバラス）』とは、『頬鬚の人』と言う意味である。――トプツィギン将軍は微笑して、密生した頬鬚を撫でた。――そこで、野蛮人の同志諸君、われわれは二千年前のキリスト教文明より賢明だなどと考えて、高慢にならないことだ。それに今日でも、全世界で聖書は本の中の本と見なされている。一体そこに何が書かれてあるか、調べて見よう。

聖書には色々な解釈が沢山ある。プロテスタントには宗派が一年の日数よりも、沢山ある。聖書の解釈も種々様々だ。そして神を悪魔にすりかえ、聖書を呪詛しているメーソンまである。しかし、われわれは弁証法的唯物論の助けをかりて、聖書解説を試みる。

聖書は二つの部分から成立しており、そのうち旧約聖書は新約聖書または福音――これを訳せば幸福な知らせという意味である――の歴史的背景、あるいは前提である。これはきわめて象徴的な書物であり、その多くは直接的意味でなく、転意で理解しなければならぬことを考慮にいれて、この福音はどこにあるかを検討しよう。

福音は、人類あるいは個人救済に関する幸福な知らせである。だからイエス・キリストを救い主というのである。ところで、さっそく論理的質問が問われる。誰から救うのか？　あるいは何から救うのか？

旧約聖書には、悪魔はどこにも書かれていないことに注意したまえ。そこには悪魔はいない。楽園でイブを誘惑したあの蛇、神学者が悪魔と見なしている蛇でさえ、旧約聖書では、悪魔でなく、蛇と名付けられている。最初にいわゆる悪魔が出てくるのは、新約聖書だけである。彼はキリストを荒野で誘惑しようとし、キリストは悪魔の軍団を、悪霊に憑かれた人から追い出す。勿論キリスト教以前の崇拝にも、悪霊とデモンがいた。われわれの悪魔もそれから自分の系図をひいている。しかし神の直接の敵としての悪魔の概念は、福音書とキリスト教の特徴的な特質である。後になって戦闘的キリスト教時代、すなわち中世になって、悪魔との闘争は魔女迫害という形で行われている。

そこでもし悪魔が神の敵であり、神の反定立（アンチテーゼ）であるなら、福音では正にこの悪魔から、人間を救済することが述べられていると、論理的にいえよう。次の問題は、一体この悪魔は何かということである。

諸君は神学文献の中で、悪魔に関する次のような特徴付けを読むことがあるだろう。これは人類の敵、最初からの殺人者、死の天使、死の友人、生命の盗賊だ。さらに悪魔は破壊者、中傷者、嘘つき、嘘の父、主なる神の猿、正義の破壊者、悪の源泉、悪徳の根だ。もしこれでも物足りないなら、悪魔とは人々を瞞着するもの、あらゆる喧嘩、不和の原理、悲しみの提供者、人民の裏切り者だ。ご覧のように、悪魔はかなり多種多様な個性である。悪魔も忙しいことだ。しかしこれはまた全くひどい話ではないか？

悪魔は、これは主なる神の猿であり、彼は万事を暗闇の中でする。しかも背後から、また逆の方向に。だから、この悪魔をつかまえるためには、われわれも悪魔の公式に準じて行動しなくてはならない。一切を逆の方向に。まず悪魔とは何かを、諸君に申し上げて、それからその核心まで分解し、果してその通りかどうかを、原典と照合して見よう。

将官教授はちょっと間をおいて、講堂を見渡した。

「さて打ち明けて言えば、弁証法的唯物論の見地からすれば悪魔とは正に、退化乃至頽廃の複雑なコンプレックス過程に他ならぬのである。この過程は、基本的には、三つの部分から成っている。すなわち変態性欲、精神病、そして有機体のもつ若干の肉体的不具である。このコンプレックスの二、三の構成要素に、われわれはすでに若干の古代文明没落期における後期の男根崇拝の中で出会っている。これらの先行文明の没落に関する実際的観察に基づいて、キリスト教の中で結晶したのが、このコンプレックスに対する態度である。このコンプレックスを悪魔としたのである。

このように弁証法的唯物論の見地からすれば、そこにいるあらゆる悪霊、デモン、不浄の力、悪い精神は、客観的実在となるのである。これは精神病、神経症の色々な種類に他ならない。

心は精神である。心の病気は悪い精神であり、不浄の力である。マルクス的弁証法の同じ方法を用いれば、すべてこれらのいわゆる魔女、悪魔、呪術者、妖怪は皆、これに相当する悪い精神、つまり精神病、神経症に憑依されている人々に他ならぬ。」

講堂の中に軽い騒ぎがおこった。トプツィギン教授は頬髭を撫でた。

「ソ連政府の幹部、同志諸君、私は諸君たちに疑惑の念が起っているのが、その目でわかる。諸君はきっとこう考えている。おじさん、言ってくれ、社会主義レアリズムの現代にお前さんの魔女だとか呪術者は、一体何のために必要なのか？　そこで私は何のために、またなぜかを諸君に申し上げるとしよう。第三十二回ソ連共産党大会の後、諸君がご存知のヨシフ・ビッサリオノウィッチ（スターリン）は、精神異常の偏執狂（パラノイア）だったことを、諸君はもう知っている。ギリシャ語で「パラノイア」は単なる狂気を意味する。現代では、パラノイアは、ありもしない強迫観――誇大妄想、被害妄想等の特徴を持った慢性的な精神異常であると解されている。誇大妄想から、スターリンの個人崇拝が生れ被害妄想から、果しない粛清、銃殺、強制収容所が生れたのである。問題は、パラノイアがその上、退化コンプレックスのもっとも危険な構成部分の一つであるという点にある。このようにスターリンは悪魔出身であった。これは、昔、もっとも悪い意味で、魔女とか呪術者と呼ばれている人々のタイプの非常に明瞭な例である。」

原子力空軍将軍ボロジンは友人の原子力潜水艦の提督カリュージュヌイを軽くつついた。

「これは何だか目新しい話だな……」

「退化過程は、大衆的である。――と将官教授は続けた――だから聖書では悪魔をさらに次のように名付けている。私の名は軍団（レギオン）だ、と。それにこれは極度に錯綜している。だから神学者たちは、悪魔は物凄く狡猾で、物事を混乱させる奴だと言っている。退化者のこの軍団（レギオン）の中で、諸君は罪人にも、義人にも、真の聖者にも出会うだろう。彼らの間にはさらに罪のある聖者と、聖者である罪人が紛れ込んでいる。ここで諸君は善にして悪なるものにも、悪にして善なるものにも出会う。

残念ながら、この軍団をよく観察すれば、義人と聖者は通常少数で、罪人が多数だ。これこそが社会的悪で、かってはこれを悪魔と称していた。これは穢れた良心を持つ人々で、彼らの間には時々、本当の魔女、吸血鬼が入っている。そして統計によれば、この悪魔の分け前に当るものが、民事的であれ、刑事的であれ、世界で行われる一切の犯罪の大多数の犯罪の大多数である。

諸君をあまりに驚かせぬうちに、具体例を諸君に示そう。優生学、すなわち人間の血統を改良する科学――に関する国際会議が、一九三二年ニューヨークで催された。その会議で、優生学の専門学者の一人が次のように直言している。

『もし米国で断種法が大幅に適用されたら、その結果、百年もたたぬうちに、われわれは、少なくとも、犯罪、狂気、精薄、白痴、変態性欲の九〇％を清算しているはずだ。欠陥や退化の

その他色々な形態は勿論のことである。このように、一世紀の間に、われわれの精神病院、監獄、精神科医の療養所は、人間の悲しみと苦悩の犠牲者から、ほとんど解放されるはずだ。』

一九五七年ニューヨークで出版された『遺伝、種族と社会』（八六ページ）の中で、ニューヨークのコロンビア大学ダン教授とドフジャンスキー教授がこれを書いているのである。ここでも諸君はこのコンプレックスの同じ構成要素を見ることができる。つまり退化、変態性欲と精神異常である。そしてその結果、これがすべての犯罪の九〇％となっている。この公式をよく記憶しておきたまえ。

革命前では、学校では神の法則を教えていた。しかしわれわれはここで諸君に、われわれの新しいソ連の神の法則――高等社会学を教える。われわれはすべてこれを、マルクス的、弁証法的唯物論の見地から分析しているため、結果として弁証法的キリスト教のようなものが現れてくる。これは、キリスト教を活性化させ、またキリスト教が何であるかを理解するための生命の水のようなものである。

中学校で諸君はニュートンの第一・第二、第三法則を学んだ。今度は高等社会学の基本法則の一つを憶えたまえ。この法則をわれわれはわかり易く、カルムイコフの第一法則という。この人はわれわれの教授の一人で、後で諸君と知り合うことになる。

さて叙上のことから出発して、カルムイコフの第一法則は次のごとく述べている。

『刑事犯並びに政治犯をふくめすべての犯罪の九〇％、夫婦のもっとも単純な離婚から、世界戦争、革命に至るまで、人類の一切の悪と不幸の九〇％は、遺伝的退化の結果である。この退化は精神異常と変態性欲から成り立っている。』

だからこそ、昔からこれを悪魔と称しているのである。

悪魔とは、主なる神の反定立（アンチテーゼ）だと、神学者たちは見なしている。後で諸君が悪魔をよく知るようになる時こそ、反対のものから、定立（テーゼ）に対する反定立（アンチテーゼ）から出発することによって、すなわち倒錯することによって、神とは何かを諸君は自分で理解できる。このようにして、われわれは諸君にわれわれの新しいソ連の神を教えることになる。昔は神秘学（ミスチカ）があったが、今は、統計学、電子計算機、コンピューターをわれわれは持っている。これが、神に関する観念を、活性化する生命の水として、諸君に与えられるだろう。

しかし神と悪魔に関する科学は、極端に矛盾したものである。例えば、私が諸君に話した、優生学に関する国際会議では退化の悪魔との闘争として、欠陥者の大衆的断種と去勢が提案されている。

しかしこのようなプログラムの実行は、ヒトラーのような狂人だけができたことである。そして同時にこの法則は第一に、彼自身に関するものであった。退化の悪魔は、原則的に極端と矛盾の上に構成されている逆説的な現象である。後でわれわれはこの悪魔を徹底的に分析するが、その時諸君自身は、これを悪魔と名付けたのは、まことに故なきことではないと信じるだろう。」

プロトコール　第二章

暗　闇　の　王

もしあなたがたのうちに、自分がこの世の知者だと思う人がいるなら、その人は知者になるために、愚かになるがよい。なぜなら、この世の知恵は、神の前では愚かなものだからである。

（コリント一書　三―一八～一九）

『学究バルトロメオ・ド・スピンは、一五三三年ベネチアで発行された自分の解説書“Tractatus de Strigibus et Lamis”で、次のように書いている。ミランドーラ地区のマラグーツ村の住民である一人の農夫がある日、朝まだきに起きて、隣り村に出かけたが、夜中の三時頃、夜明け前に森の空地に出た。そこで彼は松明の火影で踊っている人々の群れを見た。他の人々は草の上に坐って、食べたり、酒を飲んだりしている。まるでピクニックのようだ。それから彼は、多くの人々が恥かし気もなく乱痴気騒ぎに身をまかし、不作法の限りをつくして、公然と性行為をしていたのを目撃した。その時農夫は、自分が見ているのは魔人、魔女の夜の集会だと悟り、驚いて十字を切って、お祈りしながら、急いで呪わしい場所から退避した。この時、それから引続き、トプツィギン教授はキリスト教史の短かい概要を教えた。初期のキリスト教徒をどんなに迫害したか、彼らは、宣教だけをやりながら、どうして徐々に多数になっていったか。そして最後に、中世になって、彼ら自身がいかにして、宗教の少数派を、すなわち異端の残滓を、異端、魔女、魔人と称して、迫害しはじめたかを説明した。

「さて原典を読んで見よう――教授は言った――ここにモンタギュー・サマーズ著『魔法と悪魔学の歴史』（“The history of Witch craft and Demonology” by Montagne Summers, New York, 1956）がある。これはこの分野でのもっとも真面目な典拠の一つである。私はここから諸君のために、いわゆる魔人、魔女の夜の集会に関する若干の記事を朗読しよう。

夜の集会の参加者の中に、前から魔法使いの疑いをもたれていた、近所に住む二、三の名うてのならず者がいるのを彼は見のがさなかった（一一九ページ）。』

すべてこの風景は現代の米国のヒッピー族によく似ている。あるいはいわゆるソ連の反体制派、不同意者、異端思想家の酔払いに似ている。われわれは彼らを特別精神病院に入れるのだ。さて原典からも一つ例をあげる。

『ヒステリーで発作を起すマリア・ド・セインスは、一六一四年五月一七～一九日の裁判の証人として、毎日彼らは夜の集会（シュバ）を催し、そこで人間に可能な限りのもっともけがらわしい変態性欲行為にふけっていたと証言している。この女性は明らかに性的にアブノーマルで、瀆神狂と悪罵狂、すなわち悪口雑言狂にかかっていた。』（一一六ページ）。

これはソ連の女流詩人の反体制派ナタリア・ゴルバネフスカヤに似ている。彼女は全くのヒステリーで、口を開けば、けがらわしい悪口だけしか言えなかった。われわれは彼女を海外に追放した。これと同じ経緯が反体制派の作家アンドレイ・シニャフスキー、ペンネームはアブラム・テルツにもある。われわれは彼も海外に追放した。西側の悪魔の弁護人たちは、毎年毎年、彼を《自由と人権》のために闘っている闘士として持ち上げていたが、彼が西側に現れた時、ゴーゴリやプーシキンに関して、彼自身が精神異常、白痴退化者に過ぎぬと皆が思うような本を沢山出版している。さて原典から三番目の例をあげよう。

『これらのけがらわしい、役立たずたちは、汚ない、罪深い性行為に耽けり、人間の格好をして彼らの前に現れた悪魔に身をまかせた。この悪魔は男性を受動的な悪霊として、女性を能動的悪霊として利用した（一二九ページ）。』

これと同じようなことを、諸君は魔女、魔人のほとんどすべての裁判調書の中に発見できる――新しいソ連の異端審問の将官教授は続けた――弁証法的唯物論の見地から、これらのシャバッシュ（悪魔の夜の狂宴）をどう説明したらよいか？　すこぶる簡単である。キリスト教以前の異教崇拝は、特に古代ギリシャとローマの崩壊時代には、性生活の問題では非常にリベラルであった。ちなみにこのような経緯は現代の西側世界にもある。もし諸君がバッカス祭、サターン祭、つまり酒、悦楽、生殖の保護者であるバッカスやサターンの神々を祭る異教の祭りの記述を読むなら、これはまる一週間にわたる公然とあらゆる種類の愛に戯れる野蛮な躁宴であることが納得できる。それは単に男女だけでなく男性が男性と、女性が女性と、すなわち男色とレズを営んでいるのである。そしてこれとともに、動物と子供との性交、つまり獣姦と少年強姦が行われる。当時これは単なる悦楽であった。しかし現代世界では、これは変態性欲と考えられている。中世の教会はこれを罪と見なした。したがってこのような変態的傾向をもつ退化者は、秘密裡に自分らのバッ

カス祭や、サターン祭を催していたのである。異端審問はこれを魔女、魔人のシャバッシュと名付けた。これが弁証法なのである。」

教授は『悪魔と悪魔学の歴史』をぱたんと閉じた。

「同志諸君、諸君は考えるかも知れない。一体何のために、われわれソ連の指導者、元帥、外交官に、こんな埒もないシャバッシュだとか変態性欲など必要があるのか、教えて貰たいものだ、と。」

「何たることだ！」講堂から声がした。

「教授、あなたは私たちの心の中をそのままお見透しだ。私は本当にそう思っていた。」

「第一に――教授は言った――変態性欲と連動しているものは、精神異常である。第二に、変態性欲のお蔭で、この変態者たちはつねに自分たちの秘密のグループをつくる傾向がある。このグループこそがシャバッシュである。第三に、精神異常がある複合となる時、特別のタイプの人々がつくり出されるが、諸君はこれには全く気がつかない。このタイプの一つがニヒリストとアナーキスト、永久の反乱者、職業革命家である。

したがって、歴史家があらゆる革命の総括を、革命前に溯及して行いはじめ、心理学者がこれらの革命の指導者を検討する時、逆説的な結果が得られる。すなわちほとんどすべてのこれら炎のような革命家、自由を愛する人、人間を愛するという人々は実際には、精神的異常の退化者である。そしてすべての革命党、いずれにせよその上層部は、魔女、魔人、のシャバッシュである。

そして彼らを推進していくものは、彼らがヒステリックに呼号している自由愛でもないし、人間愛などではもとよりなく、全く別のものである。例えば、隠れている偏執狂（パラノイア）である。それは隠蔽されている誇大妄想、すなわち病的な栄誉欲をしばしば生み出す。これと並んでマゾヒズムも生み出す。これは一定の形式をもつ偽りの人間愛を生み出すこともある。あるいは権力、流血、破壊のマニア的渇望を生み出すサディズムをつくり出す。ここにサド・マゾヒズムが出てきて、そこでは悪魔自身も足を折りかねないような堆積となって一切が混在する。そしてこれらの退化者は、酔払いが火酒（ウォッカ）に惹かれるように、革命に惹かれていく。」

教授は再び『魔法と悪魔学の歴史』を開けた。

「だから神学者モンタギュー・サマーズは、一九二六年ロンドンで出版されたこの本の初版の序文に、一四八四年のローマ法王イノケンティウス八世の有名な回勅を註釈して、次のように書いている。

『魔女、魔人は……これは社会的伝染病である。……彼らの破壊活動は、呪術が常に政治的要因であったし、今後も要因となる以上、民族の衝突、無政府状態、赤い革命にまで拡大する。結局、魔女、魔人は一切の秩序ある社会にとって恒久的危険である』。

さて一九三〇年代のスターリンの大粛清の秘密にアプローチ

しよう。革命後、すべて精神異常のこの心優しい仲間たちは、お互い同士激しい噛み合いをはじめた。

フランス大革命の時代がこのようであった。ジロンド党とジャコバン党は、ナポレオンが彼ら全部をひねりつぶすまで、お互い同士殺し合った。ヒトラーは突撃隊の援助で権力を握ったが、やがて血の風呂を用意して、突撃隊指導者を全部そこで片付けてしまった。革命後の革命家は罐の中に入っている毒蜘蛛だ。彼らは一つの大きな蜘蛛――ナポレオン、ヒトラーあるいはスターリンがそこに生き残るまで、権力争いでお互同士噛み殺し合う。

さて同士諸君、なぜスターリンが容赦なく、古いボリシェビキやレーニン親衛隊を抹殺したか、おわかりでしょう。この親衛隊は、これが《職業革命家の党》となるように、レーニンが要求したものである。なぜスターリンが、革命の結果、権力を握った党と政府のほとんどすべての指導者を、狂犬として射殺したか、おわかりでしょう。またスターリンが内乱時代に組織された赤軍のほとんどすべての将軍たちを清算したか、おわかりだろう?

これらの革命の産物は、彼らを抹殺せぬ限り、気が狂って、陰謀、テルミドール、ボナパルチズム、反政府運動や偏向的運動を企てるようになる。偏執狂のスターリンは、誇大妄想以外に、さらに被害妄想を持っていた。しかし正にこのために、この闘争の中で勝ち残ったのである。個々のケースで、彼は間違ったかも知れないが、原則的に、大粛清は歴史的法則であった。これがすべての革命の法則である。

だからこそ、一般に預言者と思われている、また若い頃は自からベトラシェフ革命家グループに参加していたドストエフスキーが『悪霊』の中で、これらの悪霊の一人の口を藉りて、革命家について、次のごとく規定しているのである。

『これらの悪霊は、皆潰瘍、毒気、不浄である。偉大にして、優しい病める、われわれのロシアに堆積した……。無分別となり、気が狂ったわれわれは断崖から海中に身を投げ、皆溺死する。それがわれわれの道だ……。しかし病人は治療され、《イエスの足許に坐る》……人々は驚嘆して、皆眺めるであろう……』。

講堂はまるで水を打ったように静かだった。ソ連の党、政府の選ばれた人々、将軍、提督、大臣、外交官はじっと坐って、お互いにお互いを見ないようにしていた。

「すべてこれを諸君が知らなければならぬのは、単なる好奇心からだけではないのだ。――KGB第十三総局の将官教授は言った――レーニン、スターリンあるいはヒトラーのような人物は、昔もいたし、今だっている。そして今後も出るだろう。そして同志諸君、もし諸君が精神的に病気である偏執狂のわがままに従うのでなく、自分で政治を行い、平和に暮したいのならば、諸君は、諸君が一緒に仕事をしている人物がどんな人間

かを知らなくてはならない。私は諸君に簡単な歴史的概説を教えただけだ。このテーマで諸君ともっと詳細に話をする人は、私の同僚の精神病理学教授イワン・ワシリエヴィッチ・ブイコフである。」

「やれやれ――原子力空軍将軍ボロジンは頭を振った。私はもう毎晩、色々な悪魔が夢の中に出てくるんだよ。」

＊　＊　＊

モスクワの新聞には、原子力戦争の脅威に関する記事が出ていた。地球上の住民一人当りにトロチレン換算で十五トン当りの爆弾がすでに用意されている。地球人を原子にして吹き飛ばすのには、全く十分である。また核兵器の軍縮の必要も論じられていた。黒い教授団の研究所ではその間、ソ連政府の要員たちを、高等社会学の知識で武装していた。

ブイコフ教授は、KGB大将の制服で教壇に現れた。毒杯の周囲を取巻いている、肩章の蛇だけが、彼が軍医であるという所属を示していた。しかし不浄の力と戦ったこの将官教授の胸の上の勲章は、一般人と戦った将軍たちの勲章より多かった。勲章授帯の上には、社会主義労働の英雄の黄金の星が輝いていた。

机の前に坐っているソ連共産党中央委員会委員ポッドーブヌィは、ソ連最高会議議員ノビコフの方に身をかがめた。

「彼が社会主義労働の英雄に何でなったのか知っているかい？　彼はあの……スターリンが死ぬのを助けてやったと言われている。スターリンに聖餐式をしてやったのだ。」

「同志諸君――教授ははじめた――簡単にするため、歴史的発表の過程を、無限に運動するベルト・コンベアと考えて見よう。このベルトは一端から現れ、他方の端から消えてゆく。しかしこの過程の最後に若干奇妙なことが現れる。古代のエルドラドは何世紀も以前にありながら、それと交替した人々よりも遙かに賢かった。古代ローマ文化あるいは文明は、これを滅ぼした野蛮人たちよりも高度であった。そしてこれと同じ経緯が革命前の帝政ロシアにもあった。これらの輝かしい文明の内部に、すべて他の文明と同様に――有名な英国の歴史家アーノルド・トインビーはこのような文明は二十一もあると計算している――何らか秘密な**自己破壊**の力が作用し、その結果、結局は勝者となるのは、強者ではなく、弱者だった。エルドラドの場合のように、精神の弱いものか、あるいはローマや野蛮人の場合のように、物質文化の弱いものである。

あるいはロシア帝国をとって見よう。十月革命の当日は、軍事的見地からすれば、**信仰、王と祖国**のために忠誠な兵士一ヵ大隊あれば、十分だった。レーニンやボリシェビキを完全に全滅させるためには。しかるに、ヒステリーのケレンスキーにも、全帝政ロシアにも、その日このような大隊はいなかった。偶然であろうか？　否、これは歴史の法則の複雑な連鎖である。

自然が均衡を志向していることは、諸君はすでに物理学で知っている。この同じ自然の均衡法則が、人間に対して、作用している。たとえ平等でなくても、いずれにせよ、順番に人々の間に精神的、物質的富を分配しようとしている法則である。これはまた、生物学的コンベアの厳酷な法則で、どんな人間社会の構成、すなわち家族、共同体、階級、民族、国家に対しても、また全体として全人類に対しても、個人としての各人に対しても一様に関係しているものである。同志諸君おわかりですか？」

「はい。これはかなり簡単だ。」と、講堂から声が聞こえた。

「この一見、簡単な問題で、人類の優秀な頭脳が頭を痛め、哲学的に行き詰っているのである。『人生の意味は何か？』という年老いた求神者であり、抗神者でもあったトルストイのためらいがちな質問は、ここにその起源がある。また実存主義哲学者サルトルの哲学的アブラカダブラ（呪文）もここに渕源している。彼の著書の名称そのものが、正体を物語っている。すなわち『存在と無』だ。彼らの朦朧とした哲学を理解するためには、問題を次のように提起しなければならない。『もし結局、いずれにしても諸君は退化、頽廃一般の死よりも、遙かに悪い緩慢な死のコンベアにおちこむのなら、何のために生き、そして自己完成するのか？』

このコンベアの法則を知ることによって、諸君は福音書の中の難解の箇所を理解することができる。キリストの山上の垂訓を読めば、そこに次のような文句がある。

『心の貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである。』

ところで念頭にいれておかなくてはならぬことは、福音書は徹底的に、まるで暗号のように、象徴的な本であるということである。一体天国とは何か？　そう、これは単なる未来のことだ。その次に

『悲しんでいる人たちは、さいわいである。彼らは慰められるであろう。』

『柔和な人たちは、さいわいである。彼らは地を受け嗣ぐであろう。』**（マタイ伝五―四～五）**

これは何か？　そう、同じことである。未来は君たちにある！　他方、福音書にはこんな文もある。

『しかしあなた方、富んでいる人たちは、禍害だ。すでに慰めを受けてしまっているからだ。』

『あなた方、今満腹している人たちは、わざわいだ。飢えるようになるからだ。』

『あなた方、今笑っている人たちは、わざわいだ。悲しみ泣くようになるからである。』**（ルカ伝六―二四～二五）**

山上の垂訓はキリストの教えの中のもっとも大切な要素の一つであることに注意したまえ。また、上述の言葉が山上の垂訓の冒頭にあることに注意したまえ。世界に今起っていることを

すべて理解するためには、ここからはじめる必要がある。その他のことは、人間に対するこの自然の根本法則の部分にしか過ぎない。この均衡の法則とその派生的法則はきわめて強力かつ公正であり、古代の賢人はこれを神という一言で名付けた。そしてこの法則を編成した人を、神の子と言ったのである。

さて歴史的発展過程における人間を論じる場合、もし使徒の言葉を弁証法的唯物論で飜訳するならば、自然の建設力が神で、破壊力が悪魔ということになる。これが、われわれの歴史のコンベアの両端にある二つの推進力である。」

原子力空軍将官ボロジンは、隣りの机に坐っている男をひじで突っついた。

「これは君、戦闘的無神論者同盟のコルホーズ宣伝員じゃないか？」

「そうだ。深く掘り下げている。」――原子力潜水艦の提督はうなずいた。

「同志諸君。諸君は、どうしてこの私が、医学教授が、突然歴史と福音書からはじめたのかと思っているかも知れぬ。しかし高等数学のような精密科学でさえ、その頂上においては、きわめて抽象的になり、哲学に接近してくる。そして哲学はその頂上で、当然神学、すなわち神に関する科学に依拠する。」

「よろしいでしょうか？――国家計画委員会議長が発言を求めた――私がノボチェルカッシュ工業大学で勉強していた時、そこで一九三八年の粛清で数学部長の有名な教授ジミンが逮捕された。逮捕した時、彼の住居から数学の本がトラック一台と、神学に関する本がトラック二台運び去られた。ところで、このジミン教授は学生を居眠りさせるのが好きで、よく採点をつけていた。数学の最優秀学生には三点、自分自身には四点、五点を貰うのは主なる神だけだと言ったりした。このために彼は逮捕された。もっとも二年後彼は取調べの結果、釈放され、この間の俸給まで払って貰った。ということで、彼は数学と神に関しては正しかったということになるし、これをＫＧＢにおいても立証できたんですね。」

「もし諸君が今度高等医学を勉強するならば――ブイコフ教授は続けた――この高等医学を、病気や一般的病根、特に精神異常の分野での病根研究の統計学であると解釈すればこれは必ずや遺伝学つまり遺伝に関する科学に依拠し、遺伝学は歴史学、哲学にそして哲学の最高形態としての神学に移行する。

例えば、馬鹿な設問と思われるかも知れないが、糖尿病は神学とどんな関係にあるか？　そう、きわめて簡単である。それは糖尿病が遺伝するからである。そこで諸君の前に、キリスト教道徳の問題が提起されるのである。子供たちに対する両親の責任問題である。すなわち予め知っていながら病的な子供をつくってよいのか？」

将官教授はハンカチを取り出し、自分の角縁眼鏡を拭った。

「主なる神は天上に、悪魔は地上に、われわれの間に住んでいるといわれている。そこで天から地に戻って来よう。尊敬する同僚のトプツィギン教授が、すでに諸君に話している。弁証法的唯物論の見地からすれば、悪魔とは、退化、頽癈のコンプレックス過程に他ならない。それは変態性欲、精神異常と人間器官の若干の身体的不具から成立している。これは歴史的コンベアの末端にある一種の肉切り器のようなものだ。

これからは私も要約して、この複雑なコンプレックスを悪魔という一と言で呼ぶとしよう。この悪魔は小説に書かれている悪魔よりも、遙かに下劣で狡猾な代物である。当該種族の繁殖を中絶するために、退化の悪魔は人間の産児器官にとりついて、そこで悪意に満ちた、残酷な嘲笑としか思われぬ手品を演出するのである。

何が人間を動物と区別しているのか？　人間の理性である。ここから人類の科学的定義――ホモ・サスペンスすなわち理性人が渕源している。

ところでわれわれは変態性欲からでなく、精神的、神経的異常からはじめる。彼らが総体的にどのくらいいるか、調べて見よう。例えば、ここにニューヨークのフォダムス大学の神経学教授ヨセフ・バーン博士が、一九二〇年九月二十五日付け『メジカル・レポート』誌に、次のように書いている。『**人間がかかるすべての病気の九〇％以上の支配的要因は、精神であるということができる**』。

これは奇妙に思われるかも知れない。しかし、胃潰瘍のような一般的病気をとってみよう。おそらく諸君自身、この潰瘍は人間の神経と精神に密接な関係があることを知っている。同じように、いわゆる心因性すなわち精神の影響で発生するといわれている他の多くの病気がある。

バーン教授は、人間の病気のこの九〇％のうち大多数は『支配的な精神的要因、つまり精神障害を除去すれば、自然治癒する傾向がある』と断言している。だから古来から言われているだろう。『健全なる肉体に健全なる精神が宿る』。

しかし問題は、この精神障害の多くが遺伝性を持っていることで、著しく複雑になる。これは父母の罪である。そこでこれらの精神障害をなくしてしまうためには、一番簡単なのが、その両親を事前に清算してしまうか、断種することになる。しかし諸君の知人の間では、このテーマには決して触れてはならない。さもないと彼らの中のあるものは、たちまち机の上に身を乗り出し、諸君と論争しはじめ、それから諸君を避けるか、あるいは諸君の色々な悪口を言うようになる。

この九〇％にわれわれが出会うのは、これで二度目であることに注意したまえ。優生学者国際会議とカルムイコフの第一法則である。『すべての犯罪の九〇％が遺伝性退化の結果である』。

さてもっと具体的に精神異常の数を計算して見よう。例えば、

一九六〇年の米国の公式統計によると、米国には九百万の人が重い精神病にかかっている。そしてこの曲線はたえず上昇していく。精神的な病人は米国の病院の患者総数の五〇％以上を占めている。精神的病人を治療するために、米国は年に百二十億ドル、つまりその当時の軍事予算の二五％を使っている。

同じ米国の統計によれば、米国人は十二人に一人が遅かれ早かれ、精神病院に入院する。これは入院できる患者であるが、残りの精神異常者は、街頭をうろつき廻っている。そして、他人の生活に害を与える。ちなみに奇妙な符合がある。米国人の十二人に一人は、何かの秘密結社に加入している。この秘密結社は、人間主義者だなどと自称しているが、第三者は彼らをサタニストだと言っている。そして、この秘密結社は、西側で、ソ連における共産党とほとんど同じ役割を演じている。

この統計はしょっちゅう変る。次第に上昇していく。一九六六年八月二日付けのニューヨーク発行の『ディリー・ニュース』紙はその三八ページに、次のようなニュースを報道している。米国には一万八千人の精神科医と、精神科の治療を必要とする米国人千九百万人（十人に一人）がいる。このうち三百万人しか治療を受けていない。したがって米国の医者の中で、一番よく稼ぐのが精神科医だ。想像して見たまえ。千九百万人もの潜在的患者がいるのだ。

われわれはことさら諸君に米国の統計を与えているが、それは米国が西側世界の先進国だからである。ニューヨークの夕刊紙の主要テーマは殺人、強姦、自殺、際限のない強盗、ポルノ、麻薬中毒などである。そして非常に度々報じられていることは、これらの事件の主人公がこれまでにすでに精神病院にいたことがあるということである。米国では誰か自殺未遂者を捕えると、彼を直ちに精神科医のところに引張って行く。すべてこれは進歩の悲しい代償に他ならない。米国人各自が一台の自動車を持つことができた代償ともいえる。

問題は、精神異常者の数が、残念ながら、当該国の文化と文明の水準に正比例していることである。同じことが国内の各階級乃至社会グループにも関係している。これはどんなに奇妙なことであろうとも、統計が証明している。つまり、精神的な病人の最大の比率を占めているのは、インテリである。これは逆説のように思われるが、事実は事実である。知識は明白に狂気と関係している。それで前者がどこで終り、後者がどこからはじまるのか、理解するのが、時々困難になるのである。

あらゆる肯定的質は、その絶頂において、否定的な質に変っていく。無限の自由は無政府状態（アナーキ）に変り、無分別の愛はエゴイズムになる。かくして天才的知恵は狂気に移行する。おそらく、ここから奇妙な諺が生れたのだろう。真理は妙好人つまり気狂いの口を藉りて話される。天才と狂気の間のこの関係は、すでに多くの学者が気付いている。われわれが単なる社会学でなく、

高等社会学を勉強する以上、特にわれわれにとって興味のあるのは、正にこの問題である。

一九六二年六月三日付け『ニューヨーク・タイムス』紙は書籍の紹介欄で次のように報道している。最近米国の学者グループは偉人の調査を行い、次のような結論に到達した。天才と狂気の関係は総じて必然的ではないが、天才の多くは、原則として、精神的にアブノーマルである。**人類史上もっとも偉大な人の名前七十八名を選んだが、その中で三七％以上の人が、少なくとも生涯に一度ひどい精神障害にかかり、八三％以上が明らかな精神異常者で、一〇％以上が軽症の精神異常、約七％だけがノーマルな人々だった。調査を史上最大の偉人三十四名に絞ったら、天才と一緒にこの悲しむべき法則も増大した。超偉人の四〇％が重い精神障害にかかっており、九〇％以上が精神異常者だった。**

この九〇％にわれわれはこれで三回出会っていることに注目したまえ。何かの法則である。整理のため、われわれは、これをカルムイコフの法則と名付ける。彼はわれわれ教授団の一員で、この問題を体系化した。さてこれを想起しよう。

カルムイコフの第一法則。『すべての犯罪の九〇％は退化と関係がある』。

カルムイコフの第二法則。『すべての病気の九〇％は、精神障害、すなわち退化と関係がある』。もちろんバクテリアが惹起する伝染病は考慮にいれていない。

カルムイコフの第三法則。『天才の九〇％は精神的にアブノーマルである』。再び退化と関係がある。」

「具体的質問をしてよいでしょうか？――ソ連共産党中央委員会イデオロギー局長官が手をあげた――カール・マルクスやレーニン、スターリンのような天才の場合はどうですか？」

「イエス・キリストからはじまり、ヒトラーで終るこれらの天才に関しては、われわれは後で説明する。その時、諸君はもっと詳細にこの問題を知ることができる。今のところ順序をおって続ける。天才と狂気の間の関係が実際上では、どう現れているか調べて見よう。ところで諸君はカルダン・シャフトとは何か知っている。これは非常に巧妙なシャフト・ギアで、モーターと車輪を連結し、自動車、トラクター、戦車を動かす。これはいつ発明されたか言って下さい。」

机の前に坐っていたソ連自動車工業管理局長は、重々しく言った。

「そう、私の考えでは……自動車と一緒に……七十年くらい以前のことです。」

「否、カルダン伝導の原理は、天才的なイタリアの数学者カルダーノが十六世紀に発見したものだ。彼は四世紀も先進していた。天才だ！　数学の力をかりて自分の死亡日まで、全く正確に計算していたような天才だ。しかしこの日が近づいて来ても、彼の気分は壮快で、いっこうに死にそうにない。その時、

天才カルダーノは自分の計算が間違っていないことを証明するために、突然毒を飲んだ。そして死んだ。これは天才の多くの人に特徴的な病的功名心の結果である。

諸君は、ソ連哲学辞典を開いて見るとフォイエルバッハとマルクス以前に、唯物論哲学を創立した人の中に、英国の哲学者トーマス・ホッブスがいることを知るでしょう。彼は十七世紀に生きており、どんな非物質的実体、霊魂や幽霊のような存在を断乎否定していた。ところが精神科医ロムブローゾ教授の記述によると、有名な唯物論者ホッブスが暗い部屋に入るや否や、たちまちにして彼を幽霊が迫害しはじめた。彼が威丈高に否定していた存在であるその幽霊がである。

知恵と狂気の間のこの悲しむべき相互関係から出発して、ルソー、ベルグソンおよび現代の実存主義哲学者らは、最高智は合理的理性の彼岸にあると考えている。すなわち善悪を超えた彼岸である。ロシア語でこれに相当する諺は『何が何だか、わからない』である。

ところがここに、若干の哲学者に誘惑的な思想が浮かんできた。もし理性が神の賜物なら、狂気は悪魔からの賜物だ。もし狂気を理性の最高形態だとすれば、これからどんな結論が生れるか？　その時は論理的に、世界を支配している者は悪魔だということになる。だからこそ聖書ですら、悪魔はこの世の王だと言っているのだ。このような哲学的詭弁を、かってはサタニズムと称していた。現代でこれをやっているのが、キェルケゴール、サルトル、ベルジャーエフである。例えば、サルトルには『悪魔と神』という哲学書があるが、彼は故意に、その表題で悪魔を第一位に置いている。

この哲学的仮説を知りさえすれば、諸君は有名人の生活の中の興味あるエピソードを理解できる。例えば、ここにフランス・デカダンスの指導者の一人ジャン・コクトーがいる。彼は世界的天才と認められている。しかしこの男は、デカダンスの他に、なぜか悪魔術に興味を持ち、魔法用の道具や公式のコレクションを集めていた。その中でも、彼は山羊の足のついた特別の大ソファーを自分のために入手している。このソファーの上には、あらゆるサタンの面や悪魔の角が殴ぐり書きされている。昔このソファーは有名な作家アナトリー・フランスのものであった。彼は黒ミサの秘密会合で、これに坐っていた。黒ミサは魔女、魔人の中世のシャバシュと同じものである」。

新しいソ連の異端審問の将官教授は、結論した。

「あらゆる不幸は、理性と狂気の二面的問題が政治の分野における天才ともかかわっている点にある。現代の原子力時代に、ナポレオンあるいはヒトラーのような天才は、原子力戦争を開始することに対しても、躊躇しない。これは黙示録（アポカリプシス）に描かれているものよりも、悪いものとなろう。それに誰が責任者か、諸君にはわからないだろう。責任はこの目に見えない悪魔にある。

悪魔はこのような半狂人的天才の頭脳の中に巣喰っている。流行の哲学者たちは言うであろう。『それがどうしたというんだ。世界は人口過剰だ。そこでこの天才が善悪の彼岸にある、上からの意志を遂行するのさ』。同志諸君、だからこそ、この問題を諸君は知らなければならないのだ。おわかりですか？」

「当然ですよ――ソ連国防相は陰気そうに言った――哲学者は皆銃殺しなけりゃならない」。

「否――保健相が反駁した――彼らは全部精神病院に入院さすべきだ」。

＊　＊　＊

「同志諸君、さて私は諸君のために、ロムブローゾー教授著『天才と狂気』の中から、もっとも興味ある抜萃を読んであげよう。

チェザーレ・ロムブローゾー教授は、イタリア系ユダヤ人で、犯罪学すなわち心理学から見た犯罪と犯罪者に関する科学の父であり、退化学つまり退化に関する科学の父でもある。ロムブローゾー教授（一八三六―一九〇九年）はすぐれた精神科医で、精神病院の指導者で、そこで彼は自分の研究資料を蒐集した。彼の事業の一貫性に注目したまえ。最初彼は頭骸骨の構造と顔つきによる犯罪タイプの分類、いわゆるロムブローゾー表を作った。しかし間もなく、この分類はかなり不正確である。なぜなら犯罪は、外面的特徴よりも、むしろ内面的、精神的特徴に依存しているということに、彼は気付いたのだった。この道を進んで、彼は論理的に退化問題に到達した。最後に彼は次のような専攻論文を書いた。『政治的犯罪と犯罪者』。これが、われわれ『新生ロシア』の秘密政治警察が、ロムブローゾー教授の著作に関心を持つゆえんである。

犯罪学のこの父の著書は、どんな犯罪小説よりも、興味深く読まれている。そして非常に多くの愉快な契機がある。そこで同志諸君、誰か諸君の中で、劣等コンプレックスを持って、偉人を羨しがる人がいたら、ロムブローゾーの本をちょっと読むことをすすめる。すると諸君は直ちに、哀れな偉人たちを羨むのをやめ、自分を大変幸福に感じるようになる。さて、ロムブローゾー教授を引用しよう。

『**精神異常者は、一般人がそのせいにしているような、知的能力の完全な障害を露呈することは、きわめて稀な場合である。反対に病気そのものが、彼らに異常な知的活力を喚起する**』。

これはわれわれが精神病院に入れているソ連の反体制派や異端思想家にもかかわっている。彼らにはこの《異常な知的活力》がある。それが、ただ必要でないところへ向けられているのである。スターリンはこのような連中を強制収容所に追い込んだ。われわれは今この精神異常者たちを、海外に追放しているだけである。衛生学的、政治的予防対策としてだ。

ロムブローゾーの引用を続ける。

『天才も、精神異常者も、温度と気圧の変化には、極端に敏感である。彼らは温暖と晴天を好む。天気が悪く、寒かったら、全然創作はできない。狂人の場合、気圧と温度が上昇したら、発作の回数が増える」。

ちなみにある専門家は、ナポレオンがボロジンの戦いで勝てなかったのは、ちょうど秋だったからで、その上、ナポレオンは鼻風邪をひいていたからだと、考えている。

「天才人には異常に高い神経性の感覚がある。ノーマルな人にとって、ピンで刺した程度のものが、天才にとっては、短剣で刺した程度となる。ところが同時にこれは、ノイローゼのはじまりでもある。彼らは、紙上だけでなく、実際の幸福が原因で、死ぬことができる。病的な感受性は多くの天才に特徴的な非常に病的な虚栄心を生み出す。シャトーブリアンは他人に対する、また自分の靴屋に対しても、誉め言葉を、冷静に聞くことができなかった。ニュートンは、彼の仕事を批判する人は皆殺すことができた」。

「天才と狂気は、何よりも明瞭に、詩人に著しい。ある有名な詩人は、彼の詩が美しく聞こえるようにと、それを水の中で濯いだ。全く単純で、教養の少ない、詩など一度も書いたことのない人々が、精神病院に入ると、突然詩を書きはじめ、時には非常に立派な詩さえ書く」。

「精神病院に入った画家が突然詩人になることが間々ある。今まで一度も絵筆を手にしたことのない人が、理性を失ったために、画家になる。しかし精神病院でできたこの作品のごく一部だけが、興味の対象になるのであって、大部分は狂気の所産である。時には狂気は俳優的能力を駄目にすることもあるが、それに独創性を与えることだってある」。

ここに絵画におけるいわゆるモダニズムを解く鍵がある。ちなみに絵画におけるこのモダニストたちは、詩と文学におけるソ連の異端思想家と、密接な関係を持っている。このようなモダニストをわれわれは今、海外に追放しているのである。

「独創性を追求して、天才と狂人は、他人にはわからない新語を造り出す傾向がある。（すでにダンテがこれをやっている）。マニアにしばしば出会うのは、語呂合せの情熱である。精神病院から出る書き物には、同じような豊富な共鳴語や、聖書のテキストにあるのと同じ時代構成が見られる。

しかしこれは、聖書も狂人が書いたということではない。しかし……この共通点に気をつけたまえ。次にロムブローゾー教授は次のように書いている。

『学者の大多数の意見によれば、狂気は百件中九十件は、遺伝の結果である』。

またまた九〇％である。これで四度目である。順序立てるため、われわれはこれをカルムイコフの第四法則と名付ける。

『天才も、狂気も遺伝によって伝えられるが、狂気のほうが

遙かに大きな力で現れてくる。天才たちの子供の場合は、その天才が遺伝するとしても、きわめて小さい確率である。その代り狂気は遺伝により、全部か、あるいはより多く遺伝される』。

『天才の多くは、自分の質を子孫に伝えない。なぜなら退化の結果、子供がないままである。これは貴族の家族の場合と同じである。子供のない独身者としては次のような天才である。厭世哲学者ショーペンハウエル、デカルト、ライプニッツ、カント、スピノザ、ミケランジェロ、ニュートン、ラッセル、ゴーゴリ、レールモントフ』。

なおこれに、レオナルド・ダ・ビンチ、フランス革命のイデオローグのルソーを付け加えて下さい。ルソーは自分の『懺悔』の中で自から、彼が同棲していた牝牛の馬鹿女は、彼の子供を生んだのではなく、旅人の子を生んだと告白している。さらにニィチェ、マヤコフスキー、サルトル。レーニンとヒトラーは結婚はしていたが、実をいうと、単なる偽装で、架空の結婚である。

さらにロムブローゾー教授は書いている。

『結婚している天才のうち、次の人々はその同棲生活で非常に不幸であった。ソクラテス、シェークスピア、ダンテ、バイロン』。ここににも一人イワン雷帝を付加してもよい。彼は妻を沢山取り替え、息子は殺した。ピョートル大帝でさえ、第一回目の初夜は、自分の王妃とは別々に眠り、彼の息子、王子アレクセイは白痴で、アル中だった。ピョートル大帝は彼が死ぬのを多少手伝っていた。エカテリーナ女帝はピョートル大帝の孫、自分の夫ピョートル三世をあの世に送った。ちなみにこの孫は、王子アレクセイと同じように白痴だった。エカテリーナ女帝の息子パーベル一世が気狂いであったことは、周知の事実である。ピョートル三世は自分の妻エカテリーナとは一度も一緒に寝なかった。誰からパーベル一世が生れたのか？　これは国家機密に属している。革命前のパブレンコフ百科辞典でも、ピョートル大帝の実の弟、王子ヨアンは精薄だったと書かれている。さてスターリンの妻の暗殺、でなければ自殺のことを想い出したまえ。これらの偉人はまことに不幸だ。

カール・マルクス、バクーニン、トロツキーの場合、その子孫のなかには自殺が一杯ある。これはすべての革命家の普通の経緯なのである。革命家ジョージ・ワシントン、米国民主主義の父には子供がなかった。ジョージ・バーナード・ショーはその文学だけでなく、私的生活でも、色々ぺてんをやっている。彼は妻シャルロッタと、彼女が彼に対して夫婦としての要求を決して出さないという条件で、結婚している。レフ・トルストイは自分の妻のことを、彼女は彼にとって、首につけられた石だと書いている。ツルゲーネフにはフランス風の三角関係があった。彼は、自分の情婦のフランス人ポリナ・ビアルドと暮していたが、彼は彼女を、彼女の夫と一緒に養っていた。同じようなフランス風の三角関係は、未来派の詩人マヤコフスキーに

もあった。彼はリリヤ・ブリックと彼女の夫と一緒に暮していた。このフランス風の三角関係に関しては、サルトルの歌劇『出口なし』を見たまえ。

さらにロムブローゾーを続けよう。

『大多数の恵まれた才能者の子供や親族は、てんかん、白痴、マニアである。そしてまたその逆でもある。フリードリッヒ大王の母親は気狂いだ。ショーペンハウエルの叔父と祖父も気狂いである。そしてその父は銃で自殺している。ショーペンハウエルは四人の妻を持つことを唱道していたが、これに悪いことが一つある。それは姑親が四人もいることだと残念がっていた。一方彼は女性には嫌悪の情を持っており、実の母親をも、姦通したと非難していた。哲学者でありながら、彼はすべての哲学者を憎み、自分の財産の一部を飼い犬たちに遺言して贈与していた。』

『リシュリュー枢機官の妹は、彼女の背中が硝子製だと想像していた。哲学者ヘーゲルの妹は、彼女が郵便袋に変ったと思い込んでいた。』

ところで、ヘーゲルの弁証法から生れてきたのが、カール・マルクスの弁証法的唯物論である。

『遺伝という意味で、怖ろしい結果をもたらすのはアル中である。一人の始祖、アル中のマックス・ユックから、七十五年間に二百人の盗賊と殺人者、二百八十人の盲目あるいは白痴、九十人の淫売婦、早逝した三百人の子供が生れている。すべてこの家族は、損害と支出を計算すれば、国家にとっては、百万ドル以上についている。これよりもっと悪い例もある』。

さて諸君に《もっと悪い》そのような例を引用しよう。スターリンの父もアル中だった。そして、スターリンの息子ワシリイもアル中である。そして、彼はアル中隔離所で死んでしまった。

しかし酒飲みに気休めを言ってやることもできる。問題はアルコールにあるのではなく、アル中その人にあるのだ、と。しかしもし諸君が本当のアル中百人を調べるなら、その大半は退化者であることがわかる。したがって、基本的には、悪い遺伝なのである。アルコールそのものは副次的現象に過ぎない。アルコールの力をかりて、彼らは忘れようとし、また自分から逃げようとしている。麻薬中毒の多くも同じ経緯である。これは非常に複雑な精神的コンプレックスで、そこには例外もあり、退化とは何ら共通点もない類似の場合がつねに発見される。だから哲学者たちは悪魔にはアリバイと匿名が沢山あるといっている。だからわれわれは原則的に《すべて》という言葉を避ける。原則として《多数》という言葉を用いる。つねに反復される《九〇%》を想起したまえ」。

将官教授は時計をちらっと見た。

「さて、終了の時間だ。明日は土曜日だ。一杯やってもいい。でないと妻は、私が彼女の誕生日を忘れたといって、噛みつくだろう」。

（つづく）

ラスプーチンとユダヤ人⑫

―ラスプーチンの個人秘書の回想録―

アロン・シマノウィッチ

囮にされた首相

開戦前のロシアの首相はゴレムイキンであった。老人でその上、全くの病人だった彼がその職にとどまることができたのは、偏えに彼の妻のお蔭で、彼女は彼女に対するラスプーチンの好意をつなぎとめていたのである。彼女はいつもラスプーチンの邸に出入りして、あらゆる手段でラスプーチンのご機嫌をとっていた。ゴレムイキンがそれでも更迭された時、彼女は自分の夫を再び首相の地位に返り咲かせるのに成功したほどである。

ゴレムイキン夫人は、彼女の言い分によると、ラスプーチンを衷心から世話をし、馬鈴薯のジャムを作って差上げるのを義務としていたのである。彼女はそのジャムを運ぶ途中で冷めないように何を措いても大急ぎで届けるようにした。この他にも、彼女は魚のスープやリンゴや白パンをしょっちゅう送り届けている。彼女はまた馬鈴薯を十通りにも料理ができるので、それでラスプーチンの歓心を買っていた。

有名なペテルブルグの銀行家ドミトリー・ルビンシュテインは非常に誠実な人物で、ゴレムイキンと知己になりたいと言っていた。私はこの目的を叶えてやるために、ゴレムイキンに野戦病院維持費を若干寄付したらと助言した。私の助言に従ってルビンシュテインはラスプーチンを介して、ゴレムイキンに相当額の病院維持費を寄付したいと伝言を依頼した。その後でラスプーチンはゴレムイキンにル

ビンシュテインを紹介したのである。寄付金額は二十万ルーブルであった。それでルビンシュテイン夫人は病院長に任命され、このようにしてルビンシュテインはゴレムイキンと度々会うことができるようになった。

この事件はペテルブルグの他の金融家たちの間で羨望の的となり、それがラスプーチンにとってもまた大変有利となったのである。なぜならこのお蔭でルビンシュテインの威信がひどく高まったのである。彼はゴレムイキンとの知己であることを非常に誇りとし、事ある毎にこれを自慢の種にしていた。彼を尊敬している人物と話をしている時など、よくゴレムイキンをわざわざ電話口に呼び出し、さり気なくゴレムイキン夫人の健康のことを聞いたり、雑談をしたりしたが、それは彼と対談している相手にこれで威厳をつけるためであった。なぜならその相手は全市にゴレムイキンとルビンシュテインの親密さを流布することになるし、勿論それがルビンシュテインの社会的立場をより強いものにするからである。

ルビンシュテインは有名な銀行家ユンケル商会の株を大量に手に入れていた。この株を売出すために大舞踏会を開いた。この舞踏会の招待客の中に大富豪のキエフ砂糖工場主レフ・ブロッドスキーがいた。ルビンシュテインは彼にもこの株を買わせようと願っていた。そしてうまうま成功したのである。ブロッドスキーはルビンシュテインの舞踏会でゴレムイキンやプロタポポフ等の大臣やラスプーチンその他高位顕官の人々に会い、この家の主が有力大臣らとさも親し気に話をしているのを側で聞いたりした。そして彼は数百万ルーブルの株を買うことに同意したのだった。

ルビンシュテインは一流人物にのし上った。慈善事業への巨額の寄付を惜まなかった。私は彼とは仲が良く、度々彼の仕事を手伝ってやった。私が仲介して彼とラスプーチンを接近させたのである。ルビンシュテインはラスプーチンとの交際を大層高く評価していた。だからこそ貧乏なユダヤ人を援助してほしいという私の要請も快よく引きうけてくれた。私もまた進んで彼のためを図り、金融の仕事があれば、彼をどこでも推挙したのである。

皇后の銀行家

皇后はラスプーチンに、彼女が委託する金融工作のため忠実な銀行家を指名してほしいと依頼してきた。彼は勿論私に相談したので、私は彼にルビンシュテインを推薦した。ラスプーチンはルビンシュテインを呼び寄せて、彼に尋ね

た。皇后が特別に利害関係を持っているある金融問題を君に処理して貰いたいが、それを委託することができるか？ルビンシュテインは大変感動し、彼に寄せられた信頼に完全に応え、その委託事項を絶対秘密にすると誓った。彼が皇后の委託を遂行する最適の人物であることを、ルビンシュテインはラスプーチンに納得させたので、私は満足だった。

ラスプーチンは皇后に、彼女のために非常に適当な銀行家ルビンシュテインを見つけたと報告した。彼はユダヤの旧家の一族で、親類には有名な作曲家（註 アントン・グリゴリエウィッチ、一八二九～九四年）で、その上才能ある金融家がいる。皇后はこの選定に同意した。こうしてルビンシュテインは幸福の絶頂にあった。

皇后の委託とは次のようなものであった。

皇后にはドイツに貧乏な親類がいて、それを彼女は援助していた。戦争中はドイツ向けの為替送金が行われず、皇后は貧困の親類たちのことが心配であった。そこで彼女は秘密にドイツへ送金する方法はないか探していたのである。ルビンシュテインの役割はきわめて微妙で危険であったが、彼はすこぶる巧妙に皇后の委託を果し、彼女に感謝された。

ラスプーチンとの交際で、ルビンシュテインは宮廷においても、その存在を認められた。両者はお互に助け合った。ラスプーチンは個人的に自分のためにルビンシュテインから何も要求することはしなかったが、ルビンシュテインのところに、援助や職を与えてくれるようにと、困っている人々を大勢差し向けたりはした。ルビンシュテインはラスプーチンのそうした願いを断ったことは一度もなかった。しかしいくら何でも沢山の人々全部に自分の銀行で職を与えることはできなかった。そこで彼はマルソフ通りに事務所を開いた。この事務所の仕事は、彼自身にもはっきりしなかった。この事務所の従業員は仕事といった仕事は何もしていないのに、月給だけはきちんと貰っていた。ラスプーチンが彼を常に讃め、《賢こい銀行家》だと評価していたのは、ルビンシュテインのこうしたやり方のお蔭であった。

ルビンシュテインと皇后との内密の関係は誰にも分らなかったが、ルビンシュテインは、巧妙なＰＲで、彼が王室の銀行家だという風評を拡めていった。閣僚会議議長スチュルメルの秘書マヌイロフは、特に熱心に、この風評が世間で一層高まるよう苦心していた。しかし間もなく、ルビンシュテインは大打撃を蒙ったのである。彼は保険会社「ヤーコリ」の全株を買占め、莫大な利益を得て、それをスウェーデンのある保険会社に売った。「ヤーコリ」保険

会社の保険にはいっていた大きな建物の設計図を彼はスウェーデンに送った。その中にはウクライナの多くの砂糖工場の設計図が含まれていた。

これが、ニコライ・ニコラエウィッチ大公の指図で全ロシアにわたってスパイ狩りが行われていた正にその時のことであった。このスパイ狩りでは無実の人々が沢山殺されたりもした。このスパイ狩りは全面的な恐慌を惹起していた。スウェーデン国境で郵便物も旅客も厳重な検閲をうけた。検閲官がルビンシュテインが送った設計図を見た時、彼らは大スパイ組織の証拠を摘発したと躍り上ったのである。これはスチュルメル任命直後のことであり、老人のゴレムイキンももはや彼を援助することはできなかった。ラスプーチンもまた、ルビンシュテインの若干の金融上の奸計に不満を持っており、ルビンシュテインにそれほど好意的ではなかった。軍部の命令でルビンシュテインは逮捕された。これは全ロシアの耳目を集めた。彼の逮捕はユダヤ人にとって特に不愉快であった。なぜなら、それはユダヤ人によるスパイ活動という噂に新しい種子を蒔いたからである。ルビンシュテインの友人で、クレインミヘリ伯爵夫人と仲の良かった領事ウォリフソンも逮捕された。

ルビンシュテインの逮捕で、皇后は大ショックを受けた。彼女はてっきりルビンシュテインが彼女の委託を実行したことが原因で逮捕されたのだと考えていた。彼の逮捕は彼女の委託事項とは何の関係もないことが判って、彼女の心配も一応なくなったが、それでもルビンシュテインと彼女の関係がどうかいう拍子に発覚し、やがて未曽有のスキャンダルになるのではないかと恐れていた。このことが皇后をひどく脅かしていた。

皇后は五等官のワルウェフに命じて前線の本営に行かせ、そこで事件を揉み消す手段を講じさせたのである。彼女はまず事件の全貌を知るためにグルコ将軍に依頼せよと彼に助言した。グルコの説明によると、ルビンシュテインの逮捕は十分な理由があってのことでないということであった。彼の意見によると、軍部は全般的にユダヤ人を迫害する目的で逮捕したのだというのである。

絞首刑がルビンシュテインを脅かしていた。グルコ将軍は告訴状の中味を知っていたので、ルビンシュテインは総じて軍事的犯罪は犯していないという結論を出して、報告書を作成した。しかしユダヤ人の大敵であるルズスキーは彼に反対であった。ルビンシュテインがペテルブルグにいては釈放されるかも知れないと危懼したので、彼とウォリフソンをプスコフ監獄に移送するよう命令を出した。事件

審理がバチューシュキン将軍委員会に委ねられたので、それは一層大規模なものとなったのである。

ユダヤ人すべてが非常な不安に陥っていた。ユダヤ人社会の代表者たちは寄るとさわると会議を開いて、ユダヤ人迫害問題を論じ合っていた。これらの会議の一つに私も招かれた。皆は私に対してユダヤ民族のために尽力してほしいと申し出てきた。私が皇帝夫妻、ヴィルボワ夫人、ラスプーチン、その他の大臣たちに交際を持っているので、出席している人々は皆こうした事態の救済ができるのは私を措いてないと考えていた。私はどうしてもルビンシュテイン事件を潰させなければならなかった。なぜならこの事件は、かつてのベイリス事件当時と同じ程度にユダヤ人の事業そのものに対して害毒を及ぼすかも知れないからであった。私は事態の危険性をよく意識し、ユダヤ人の上に切迫している災厄を阻止するため、あらゆる手段を講じなくてはならないと考えた。

まず第一に私が努力したことは、溝のできているルビンシュテインとラスプーチンを和解させることであった。そして、ラスプーチンは彼のために配慮することに同意した。そこで私の指示によってルビンシュテイン夫人はラスプーチンを訪問した。彼女は夫の無罪をラスプーチンに納得させようとし、一切はユダヤ人の敵の陰謀だと説明し、身も世もなく号泣した。ラスプーチンは非常に優しく彼女をいたわり、即刻一緒にツァールスコエ・セロに出かけようと言ってくれた。

皇后は二人を施療院で接見した。ラスプーチンは皇后に無罪なのに逮捕された人を助けてくれるよう依頼した。彼女はルビンシュテイン夫人に詳細に色々尋ね、最後にこう言った。

『安心してお帰りなさい。私は本営に出かけ、皇帝に一切お話します。その結果は電話であなたにお知らせします』。

ルビンシュテイン夫人は皇后の優しい言葉で幸福一杯になった。

ところで逮捕から釈放してくれるよう請願を提出する必要があった。だが驚いたことに、有名な弁護士たちがその作成を拒否したのである。ルビンシュテインと仲の良かった弁護士たちまでも彼のことなど聞こうともしなかった。彼らは皆、軍部を恐れていたのである。しかし形式手続き上、請願しなければ、皇后たりともどうすることもできない。そこで私は請願書を作成することを私の長男に委託した。私達はこの請願を皇后に渡した。そしてユダヤ人の新年前に皇后から電報を受取ったのである。

『シマノウィッチ、お祝いします。私達の銀行家は釈放

された。アレクサンドラ』

翌日ルビンシュテイン夫人はプスコフに出かけた。彼女はもう自由になった夫に会えると心弾ませていた。しかし彼女の喜びは尚早だった。

ルビンシュテインの釈放がどうして遅れているのか、原因究明に努力した。そして間もなくその理由が判明したのである。ルビンシュテインはボエイコフ兄弟と共同で銀行を設立したことがある。この銀行の経営は思わしくなく。ボエイコフ兄弟はそれをルビンシュテインのせいにしたのである。彼らはこの事業で約八十万ルーブル損をした。いわば大損害である。その時以来、彼らはルビンシュテインの敵となっていた。兄弟の一人は宮廷衛戍司令官だった。ルビンシュテイン釈放の皇帝の命令を受けても、それを放置していたのだった。この事情を私は皇帝がツァールスコエ・セロに帰るまでにはっきりさせた。教会の勤行の後で、私は皇帝と直かに対談することに成功した。皇帝はボエイコフの行為を非常に怒り、新しい請願を皇帝に提出するよう要求した。皇帝の許可済みのこの請願書は、ボエイコフの手を経ずに、該当機関に執行するよう渡されたのである。そしてルビンシュテインはついに釈放された。皇后はボエイコフが皇帝の命令を無視して放置したことを知って、皇帝に対してひどく詰ったが、皇帝は黙ったままで、自分の寵臣を弁護しようともしなかった。このような場面はこれがはじめてのことでないという印象だった。

ルビンシュテイン事件で私達が勝ったことは、私にとってきわめて重大だった。というのは、この勝利のお蔭でユダヤ民族は派生が予想される多くの新しい災厄を避けることができたからである。

ルビンシュテインの二度目の逮捕

だが、ルビンシュテインの自由は束の間のことであった。彼が釈放されて間もなく、ラスプーチンが殺された。私は戦術的に大きな誤ちを犯したのだった。そのせいでルビンシュテインに対する事件が再び蒸し返されたのである。彼は再び逮捕された。事件は次のとおりである。

ラスプーチンの死後、皇帝は私に対して一層愛顧してくれた。というのは、私がラスプーチンの計画を熟知していると思われていたからだった。ラスプーチンを埋葬した後で、私は皇帝に呼び出された。皇帝はラスプーチンの希望や意図について私に詳しく説明を求めたりした。皇帝の信任のお蔭で、私はラスプーチンと一緒に予定していたわれ

らの大臣候補を何人か大臣に推挙することができた。

革命の前の年には、すべての大臣は私とラスプーチンの指図どおりに任免されるようになっていた。候補者推薦に際しては、二つの考えを基準にした。すなわち予想されている大臣がドイツとの講和締結にどのくらい役立つか、そしてユダヤ人の同権獲得にどの程度援助できるかということである。

ラスプーチンの生前に、私は当時元老院議長であり私の法律顧問でもあったドブロボリスキーを法務大臣に予定していた。彼は頑丈で、外見では遠慮深い男であった。しかし彼の助力で元老院では色々なことができたのである。彼は非常に銭を愛し、贈り物をすれば何でもご用を勤める。したがって私にとっては大変有難い存在であった。総じてこのような人物はペテルブルグにはワンサといた。

私がドブロボリスキーを法務大臣に推挙しようとしたのは、彼が私の望みを何でも感謝して果してくれると考えたからである。ところが彼は何か汚ない事件に巻き込れており、上流社会でその評判はすこぶる芳しくなかったのだった。それで彼を大臣に推挙するのは、私にとって非常に困難であった。しかもこの任命は、世間や新聞でとても多くの論議を惹起した。

ドブロボリスキーの任命は、ラスプーチンの死後、それも私が彼を皇帝に提案した結果行われた。その上、彼が旧宮廷のグループにかかわっているなどとは、私は夢にも知らなかった。後で知ったことであるが、彼はローゼン男爵夫人家と親友であり、ここで彼はしばしばルビンシュテイン夫人と会合していた。彼らは心霊術の実験をやっていたのである。ところがルビンシュテイン夫人とドブロボリスキーがそのサロンで喧嘩をして、そのため二人は敵同士になってしまった。ということで、ルビンシュテインを二度目の逮捕から釈放することに、彼が私に助力しないことは、明らかであった。それどころか彼が私達に対して敵対していたのを知り、私は幻滅感に陥った。彼は皇帝にはじめて謁見した時、皇帝にルビンシュテインの再逮捕を進言していたのである。その理由は彼の見解によると、ルビンシュテインは軍事スパイの嫌疑が濃厚だというのである。その結果、意志のない皇帝はルビンシュテイン事件の中止に関する彼の指令を取消し、彼を再逮捕することに同意したのである。

ドブロボリスキーのこの行動は、私達には全く知らされず、不意打だったので、何をどうしてよいのかわからなかった。私はドブロボリスキーのところに出かけ、彼を詰問した。私は彼を罵倒し、すぐにでも大臣を辞めさせると脅

した。私は怒りにまかせて、テーブルを拳で殴りさえした。た。しかし古狐のドブロボリスキーは、再逮捕のイニシアチブをとったのは皇帝なのだと主張し、かなり挑戦的に振舞った。とはいえ、私達の仲間、つまり皇后やヴィルボワ夫人と公然と断交するほどの勇気も彼にはなかった。

私はドブロボリスキーと会談した後、直ちに皇后のところに行き、ことの一部始終を申し上げた。皇后は絶望のあまり頭を抱えこんで、私に言った。

『シマノウィッチ、あなたとしたことが、とんでもないことを仕出かした』。

旧宮廷の味方の一人を法務大臣に任命したことが、皇后にとっては最も好ましくない結果を招来したのである。皇后がドイツに送金しているからくりが暴露するかも知れないという脅威が、再び現れてきた。皇后が落着きを取戻すまでには、かなり長い時間がかかった。彼女は数回繰返して言った。

『あなたは私達皆を滅ぼしてしまった。シマノウィッチ、私達皆を滅ぼした』。

私は皇后の前に跪いて、言った。

『何卒お許し下さい、皇后陛下。しかし事態はまだ取りかえしができます。ドブロボリスキーを追放しなければなりません』。

皇后は、私達が信任している内相プロタポポフのところにさっそく出かけ、善後策を相談するようにと提言された。プロタポポフもドブロボリスキーの裏切りに憤慨した。しかし彼を更迭させるには、次のような事情が障碍となった。というのは、皇帝はドブロボリスキーの大臣任命はてっきりラスプーチンの考えによるものだと信じていたからである。ドブロボリスキー自身、皇帝がラスプーチンの指図をどんなに尊重しているかを知り抜いていたし、それで私達に対する敵意を募らせているのである。プロタポポフはドブロボリスキーを電話口に呼び出し、強く彼を非難した。しかしそれは何の役にも立たなかった。ドブロボリスキーは相変らず強硬で、形式的に皇帝に罪をなすりつけるだけであった。

事ここに到って、私は私の経験済みの手段——贈賄の助けをかりる決心をした。プロタポポフもこれに賛成したので、私達は私の計画をすぐさま実行することに決めたのである。

翌日、私はルビンシュテイン夫人と一緒に銀行に出かけ、そこで彼女は十万ルーブル手にした。ドブロボリスキーの愛娘が婚約したばかりであることを、私は知っていたので、

私は若干の宝石も携行して行った。ドブロポリスキーはこの誘惑に抗し切れず、彼女から現金で十万ルーブルと自分の娘の結婚祝いとしての宝石を受取って、ルビンシュテインに対する裁判取調べを中止することに同意した。

しかし、彼は自分の約束を完全には守らなかった。私達に譲ったのは、ルビンシュテインを監獄から療養所（サナトリューム）に移すということだけであった。しかしそこで彼はいずれにせよ、以前よりも身柄を拘束されず便宜をうけたのではあった。そして、やがて革命が起った。臨時政府の首脳にケレンスキーがなった時、ルビンシュテイン夫人は彼女と仲の良い弁護士ザルードヌイの仲介で、はじめて夫を釈放させることができたのである。

架空の革命計画

一九一六年になると、ラスプーチンは、自分は戦争反対であると、公然発表するようになった。彼は常にできるだけ速やかに講和締結をせよと発言した。皇帝はこのことには耳を傾けようともしないといわれても、彼は次のように言っていた。悪いのは《老婆（ババア）》だ。彼女が水中に石を投げ込んだ。そして今となっては、その石を見つけることが難しくなった、と。彼は皇后のことを諷しているのである。彼女は露英友好を宣伝していた。ラスプーチンはこの同盟は成功の見込みが少ないと思っていた。彼は私によく言っていた。講和交渉を喚起する可能性が唯一つある。それは革命だ。革命だけがロシアを同盟国との義務から解放できる、と。ラスプーチンはロシアの政治未来を非常に暗い色彩で描いていた。彼は好んで次のように言っていた。

『大臣たちときたら皆詐欺師だ。ところが貴族階級は何でもかでも噛みつくだけだ。皇帝には本当の相談相手がいない。出口が見えない。彼はウロウロして、戦争か、講和か迷っている。講和締結を主張し、その必要を皇帝に納得させる大臣を私達は見つけることができるかも知れない。皇后（ママ）は講和を望んでいるが、泣いてばっかりいる。皇后の妹エリザベータは戦争に夢中で、彼女はドイツ人であるのに、皆をドイツ人に刃向かわせている。彼女は私を追放し、皇后を修道院に檻禁することを、皇帝に対しても、要求している。彼女がこれを要求しているのは、モスクワ貴族の委託によるものだ。皇后は彼女を追放した。そして皇帝も彼女に、彼女が建てた修道院に帰ったほうがよいと勧めている。彼女が奸計をめぐらすことができなくなって結構なことだ。でなかったら私まで彼女のせいで安全ではなくな

る。しかし今では私達のほうが勝ったのだ』。

皇后の妹がツァールスコエ・セロを訪問している時は、ラスプーチンはひどく気が揉めた。彼女の意図を知悉した時、彼は昂奮して、色々なメモを書き、それを自分の枕の下に置いた。そして翌日になって、自分の勝利を確信していたのである。皇帝は彼女の奸計を峻拒したが、事態はひどく危険となっていたので、ラスプーチン反対が表面化した時に備えて危険と思われる書類を焼却しなければならないと私は考えた。これは主としてロシア中からラスプーチンに送られた請願書類で、その量は皇后への請願よりも多かった。書類の仕分けは主教イシドールが手伝ってくれた。

その結果確認されたことだが、皇帝に対する信望が揺らいでいることがわかった。革命の前年ともなると、皇帝宛の請願数がひどく減ってきている点にそれは現れていた。皇后はこうした現象を非常に憂慮した。彼女はできる限りすべての請願を叶えてやろうと努力した。私達はこの事態を私達の目的のために利用するように努め、私達に依頼してくる多くの人々に、請願は叶えられることを信じて、皇后宛に請願を提出するよう助言したのである。

ラスプーチンの講和宣伝は、ロシアの同盟国代表に不満を喚起した。フランス大使パレオローグはラスプーチンと会見したが、狡猾な農奴から何も得ることはできなかった。ある日、ラスプーチンの崇拝者の一人を介して、一人の英国人女性画家が、ラスプーチンの肖像を描かせてほしいと申し込んできた。ラスプーチンはこれに同意した。しかし仕事は遅々として捗らなかった。約半年経って、ラスプーチンは彼女を放り出してこう言った。

『君が私から何を手に入れようとしているか、判っているのさ。だが、君には私は瞞せないよ』。

この女性画家は英国大使ビュックネンの意をうけて、ラスプーチンを調査するために、ラスプーチンに接近しようとしていたのが、判明したのである。

プロタポポフの任命後は、ラスプーチンは戦争終結が可能だという希望を抱くようになった。彼は言った。

『皇帝は今では忠実な相談相手を持っている。無意味な流血を阻止することに成功するかも知れない』。

ラスプーチンは会議を開いた。この会議にはプロタポポフ以外に、ペテルブルグ守備隊長ハバロフ将軍、警備隊長グロバチョフ将軍、ペテルブルグ要塞隊長ニキーチン将軍らが参加していた。ラスプーチンが驚いたことは、プロタポポフが自分の同僚クルロフ将軍もこの席に連れて来たことである。

（つづく）

―ロシア東方侵略史―㉑

アンドレィ・アナトリウィッチ・ロストフスキー

⑧ アフガン問題とグルジヤ事件

特に英国が神経過敏だった地域でのロシアの多様な活動に対し、ロンドンではどのような反作用があったのか？それは、今われわれが注目すべきことである。ベルリン会議以後の時代、つまりテッケ・トルクメンの征服およびトランス・カスピ鉄道建設の時代には英国とロシアの対立がもっとも尖鋭化していた。ここで想起しなくてはならないのは、アフガニスタンとロシア・トルキスタンの間の国境設定の試みが失敗したということである。ロシアの外相ギエルスは一八八三年八月六日および翌八四年の六月八日付でロンドン駐在のロシア大使スタール男爵に指令を発し、その中でロシアの見解についての解説を与えている。トルキスタンにおけるロシアの立場について、彼はこう記している。

『この立場は……インドで英国を迫害しようという意向も、興味もわれわれは持っていない。いわば純粋に防衛的である。しかし、それは必要に応じて攻勢的立場にもなり

得る行動の基礎をわれわれに与えている。』

『英国は、われわれがどこででも手を束ねている限り、大陸同盟の支援を得て、至るところでわれわれを撃破しようとすれば、それも可能である。しかし、大国家である以上、そんな立場に甘んじてはいられない。……だから、われわれはトルキスタンおよびトルクメンの草原地帯に充分堅固な軍事的拠点をわれわれ自身のために建設しようとするに至った。……われわれはこの防衛的な立場に満足している。』

英露の国境設定共同委員会は満足な国境を協議しようとしていたが、開幕早々から双方の随員の数とか、英国側のエキスパートの出席の可否、あるいは委員会に先立って境界地域を決定するかどうかといったつまらぬ瑣末な問題にかかずらってしまった。こうしたことで延引し紛糾し、ついには英国本国での世論の昂奮も加わり、危機的な状態をはらんだのだった。

一方、カフカーズ軍区の指揮官で、後にトルキスタン軍の高級士官になった参謀副官のドンドゥコフ・コルサコフ公爵は、メルヴ近郊の新領土を視察した。彼の一八八四年六月十五日付のチフリスからの報告書によると、この地方でのロシアの唯一の目的はゲリラ的部族の鎮定と経済的開発であるとしている。アム・ダリア川を越えて進出することについて、彼は『インド征服を考えたりするのは、狂人の妄想』だと指摘している。

ロシア側から見た全体的な情況は一八八四年のクリスマス・イブに、ペテルブルグで開かれた御前会議で明確にされた。この時の決定によれば、国境はヘラートから百十キロの距離で、したがってペンジュー地方およびズルフィカー峠を含むものとなっている。ロシア軍隊はこのラインを占領確保するが、そこから先には進出しないということだった。

ズルフィカー占領が伝えられると、ロンドンではまたして新しい昂奮の波が起った。ところで、一体その峠がアフガニスタンにあるのかどうかといった論議も相次いだ。英露共にその地域の地理的知識に乏しかったというのが実情だった。英国駐在ロシア大使からは、ロシアがヘラートに進出しようとしているとの英国の疑念を解くことが困難だということ、さらに彼らが軍事的準備を進めていると報告してきた。一八八五年三月十五日付のギェルス外相からスタール大使への書信には、

『もう一度グランヴィル卿に対しロシア帝国政府は一般に流布されているような意志はさらさらないことを伝えられたい。ロシアはアフガニスタンのどの地点にも何の敵対

的計画は持っていない。誤解なく英国との友好関係を維持することが望ましい。こうした見地を確認するための最善の方法は、二強国の勢力範囲の間にちゃんとした境界を設定することだと考えられる』。

と述べられていた。

だが、こうした緊迫した情勢下では、避けようもなくアク・テーペでロシア軍とアフガン軍の衝突が発生した。これはコウチカ事件といわれている。両軍とも相手方を非難した。つまり、英国はロシアの侵略的行為を糾弾したし、ロシアはロシアで英国の士官がアフガン軍の攻撃を指揮したといっている。グラッドストーンは英国議会で追加予算を要求し、戦争の不可避なことを暗示した。一方、ロシア政府もウラジボストク港に水雷が敷設されたと声明した。数週間の間、今にも戦争が勃発しそうな緊迫した事態がつづいたが、デンマーク国王から調停が提案され、さらにロシア側から国境線の若干の修正が持ち出されたため、ようやく危機を脱することができた。永い厄介な協議に終止符が打たれ、一八八五年九月十日、協定が調印され、ロシアの希望する国境線を確保することができた。

中央アジアに関して英国との新たな衝突が起ったのは、一八九二年になってからで、パミール地方のトルキスタンの境界をもっと明確に規定することが必要となった。この事件はこの僻遠の山間の平原がロシア軍によって占領されたことから惹起された。満足な境界線が設定されるまでの協議に三年もかかった。パミール地方では、インドとロシアは直接に境を接していて、両者の間にはアフガニスタンのような緩衝地帯がなかった。二万五千フィートもの高峻な山脈が障害となって大規模な作戦の展開を阻んではいたものの、インド政府はカシミール平原の安全を脅やかされることを恐れていた。つまりは、新たなロシアの進出を疑惑の目で注視していたのである。

しかし、この事件には有益な点もあった。というのも、今まで実際には知られていなかった僻地の科学的調査を促進したことである。この地方の東北方面に入った最初のヨーロッパ人はスコベレフだった。彼は、グロムチェフスキーやヤーノフらの数多くの探険家を従えてロシア方面からの探険を完成した。また、インド側からはロックハート、リトゥルデイル、ヤングハズバンド、スヴェン・ヘディン等が探険に当った。中でもカーゾン卿はその科学的関心がロシアの進出を阻止しようという政治的動機と一致していることに留意していた。

ところでこの紛争は、一八九五年、パミールのビクトリ

ア湖畔でシェビコフスキー将軍一行のロシア代表団とジェラールド将軍らの英国代表団の会見で解決された。この湖から中国国境に至る国境線がうまく設定されたが、これは英露双方の測量結果をまとめてでき上ったものだった。ともかく、こうしてこの地域すべてが実際に現地踏査によって探険されたのである。

この事件はまた他の視点からも特徴的であった。つまり、これを契機にロシア外交政策の方向転換という傾向を露呈しているのである。細心で円満な政治家だったギエルスは死の床に就いており、ロシアの外交政策はようやく増大しつつあった軍部の勢力に抵抗できない官僚たちによって動かされていた。意志強固で平和な心情を持っていた皇帝アレクサンドル三世の後は、病弱の子ニコライ二世が継承していた。その結果、外務省は国際関係だけを考慮していたのに反し、陸軍省は中央アジアで発生するかも知れない英国の侵略に対しての前衛拠点としてのパミールの戦術的価値ばかりに関心を抱いていた。当時ロシアでは、軍部が外務省の円滑な工作を進めるのに障碍を与えていた。一時、外務大臣だったカプニスト伯は絶望してひそかにスタール男爵に手紙を送り、陸軍大臣バノフスキーの好戦的な態度を『獣は時に馬鹿のように頑迷である』と非難しているほどである。

こうした情勢は危機の発展を予想させた。ロシアは、過去一世紀を通じて成功した理由ともいうべきアジア政策の慎重さから抜け出そうとしていた。

中央アジアにおけるロシアの征服の反動は、ロシア軍に事実上占拠されている地域を越えて波及していった。アフガニスタンがどのようにして紛争に捲き込まれたかは、すでに見てきた通りである。ロシアの新領土の東の境、つまり中国の新疆省というより中国トルキスタンとして知られている地方が、また多大な影響を受けなければならなかった。クルジャ（伊寧）とかカシュガル（喀什）とかは、この地方の重要な中心地だが、あまりに僻遠なため外界にはほとんど知られていない。そのためここでの事件には従来正当な関心が払われなかったうらみがある。しかし、十九世紀の最後の十年と二十世紀はじめの二十年において世界情勢の均衡を破ったほど完全に極東の様相を一変させたような事件――中国分割の試み、日清戦争、日露戦争、中国革命の端緒ともいうべき原因はここに溯ることができそうである。

今でこそ中国の政治的一部とはいっているものの、**新疆は事実上はトルキスタンの延長であり、同様にキルギス、タタール、タランチ、ドーガン、ウズベク、カラ・カルパック、トルグート、カルマックなどと民俗的にも混淆して**

いる。イスラム教とジャガタイ・トルコ語が普遍的な宗教と言語だし、この地方はまったく中国本土とは隔絶しているし、地勢的にもゴビの大砂漠が中国との間をへだてている。この地方の北半はジュンガリアの領域だったし、十八世紀になってカルマック国が滅びた後、中国人が植民したというだけだった。

ところでここに中国人は、政治的中心地としてクルジャ（伊寧）の町を建設し、六つの要塞には主として満洲人の駐屯兵を配置した。彼らは、中国から開拓民を移入し、しかも好戦的な満洲部族で構成した軍事的植民地を形成した。こうして、彼らはある程度までコサックを国境地帯に配置したロシアに対抗していた。中国人もロシアに倣って犯罪者をクルジャに送り込んでいた。シベリアに罪人を流刑した同じような政策が、カシュガルでもとられていた。しかし、この地方はジュンガリアが陥落した後、クルジャからの中国軍によって征服され、大殺戮によってそこの土着の人口は絶滅してしまったのである。

こうした恐るべき大殺戮を行ったものの、イリ地方やカシュガル（喀什）での中国人の占領は相変らず不安定だった。トルキスタン側からの人口の流入は絶えず行われたし、中国人は土着の異種族同士の相互の憎悪に助けられてやっと自らの存在を保っていた。とはいえ反乱や動揺を回避することはできなかった。こうした情勢の中で、この地方がロシア領になろうとする中央アジア各地の事件に対し、特に過敏だったことはもちろんである。

一八六二年から六四年にかけては、とりわけ深刻な反乱が起り、やがて一般的な暴動にまで発展した。始めはドーガン族、後にはタランチ族による反乱だった。中国人街は破壊され、焼き払われ、中国人や満洲人は次々に殺されていった。この時、ウルムチ（烏魯木斉）地方だけでも十三万人の人命が失われた。反乱軍は、ウルムチ市を占領して、清国や新疆との連絡を絶ち、この地に独立政府を樹立した。どうにもならない窮地に追い込まれた清国政府はシベリア国境のロシアの官憲にすぐさま援助してほしいと依頼したのだった。しかし、西シベリア総督は、かたくなに中立を守り、国境を閉鎖し、万一に備えて兵力を増強した。

しかし、この地方に隣接していたセミレチェ（七河地方）のロシア領は、行政的にいえばシベリアから分離してトルキスタン総督カウフマンの管轄下にあり、彼は独自の外交政策を行う権限を与えられていたのである。カウフマンを蹶起させた理由は、反乱軍が掠奪的な侵略を行い、国境を越えてロシア・トルキスタンに侵入したからだった。中でも、カシュガルで発生した諸事件によって触発された。ここでは強力な反乱軍の国家が、ヤクブ・ベックという不敵

の男の力で設立されていた。彼は、自らをアミアと称していた。このアミアという称号は、コンスタンチノープルで英国大使に強要された結果、カリフの資格によってトルコのサルタンが彼に与えたものである。代々、ロシアの敵だったトルコの勢力下にカシュガルが収めたことは、中央アジアでのロシアの立場を困難にした。当時、コンスタンチノープルで英国が比類なき優勢を保っていた。ということは、そこが蔭では英国の保護国だという意味を持っていた。事実、英国およびポーランドの士官はヤクブ・ベックの宮廷に姿を現していたし、四万人もの近代的軍隊が彼らによって組織され、しかも近代的技術を使った兵器工場がカシュガルに建設されたのである。カウフマンはこうした情勢の危険性をよく認識していた。中央アジアでのロシアの地位は、南方のアフガニスタンからだけでなく、東方からも脅かされていたのであった。

ロシア政府はヤクブを承認することを拒否したので、ヤクブの側はその報復措置としてロシア貿易に対してその門戸を閉鎖した。いかにも典型的な東洋的表現によって、ヤクブは次のように記している。

『ロシア皇帝の国土は広大であらゆる種類の賢人や有能な策士が集っている。それは他の七つの国々より優れている。わが国土は、貴国に比較すると貧しい廃墟にすぎない。今や中国勢力が壊滅して六年、かっての良いものは失われ、商業といったものも何もなくなってしまった。これが、貴国の裕福な商人を当地に入れない理由であって他意はない。なぜなら富商たちがこの地に来訪しても、彼らが求めるものは廃墟以外何もないからである』。

しかし、やがてヤクブとロシアとの間に通商条約が結ばれ、ロシア側は大いに満足したが、これは同時にロシアが実質的にヤクブを承認したことにもなった。

一方、カウフマン総督はロシアにとって情勢を展望するのに絶好の地であるムジャルト峠を占領し、クルジャに至る山道を軍事技術者に建設させ有事に備えようとしていた。こうしてすべての準備を整えていた折も折、フォーサイスを長とする英国の使節団が、カシュガルを訪れた。こんな情勢の中でヤクブは自分の立場の重要性を必要以上に意識し、ややのぼせ上ったようである。彼は、『予は、わが兄弟であるロシア皇帝との友好を切に希望する』とさえ記している。と同時に彼はクルジャのタランチ回教国を征服しようと、北方に勢力の伸張を開始した。だが、これは英国によるトルキスタンの包囲およびトルキスタンとシベリアの中間地帯に当るジュンガリア方面への英国人の進出をもたらした。イリ川流域からの側面攻撃は、過去の苦い経験のとおりモンゴルによる大侵入のような危機を予測させた。

これは、単にロシア領中央アジアを脅かすだけでなく、シベリアとさらにヨーロッパ・ロシアを危険にさらすことだろう。

こうした判断で即刻行動を起こそうと決心したカウフマンは、コルパコフスキー将軍に進撃してクルジャを占領するよう命令した。ロシア軍が来襲すると知ったタランチ族は中国人とドーガン族の殺戮をはじめたが、コルパコフスキー将軍がこの虐殺を阻止したのだった。コルパコフスキー将軍は、こんな野蛮な行為を中止しなければクルジャのサルタンの首をはねると嚇した。こうした事件を目撃した中国人の一学者が、清国政府に宛てた公報は一読の価値がある。

『ロシア軍の弾丸は雨のように降りそそぎ、まるでイナゴが飛ぶような様子であった。トルキスタン軍は破れて、大混乱のうちにクルジャに退却した。七河地方のコルバゴフスキー将軍は、残留した中国人、満洲人をなだめ一人の人間も傷つけなかった。また、一木一草、一羽のフクロウ、一匹の犬も損わず、髪の毛一筋もいためたりしなかった。……幸いなことに、天は人類を絶滅することを許されなかった。大ロシア帝国の将軍コルパコフスキーは、人道愛と誠実を抱く軍隊を駆使して治安を推持した。わずかばかりの外国軍隊が、混乱のさなかから住民を救い、最少の被害でこの地を征服したのだった。だから、当地の住民は将軍の軍隊を嬉々として歓迎した』。

この教養ある清国の官僚の目には、人類がグルジャの崩壊と共に終焉するのではないかと思えたのである。これは全く当時欧米で生起した大事件を研究する人々にとっては気恥しさを感じるようなよい教訓だった。

カウフマンがクルジャを占領したのはただロシア・トルキスタンの利害だけ考えて蹶起したのであり、アジア全体におけるロシアの政策という広い見解を持ってはいなかった。もっとも、コルパコフスキーにイリ地方への進出を命令してから、彼がペテルブルグに送った報告書では、ヤクブ・ベックのクルジャに対する工作によって起される危険およびこの地方からの英国勢力追放の必要性といったことについて十分実証的に論じていた。しかし、ペテルブルグの外務省としては、もっと広いロシアの政策の一般的調整を考えなくてはならず、この事件ではすこぶる当惑させられた。東洋におけるロシアの総督にあまり大きな独立的権限を与える危険が明白になってきた。ロシア政府としては伝統的に清国との友好関係の維持を願っていたにも拘らず、極東ではムラビヨフ、また今回、中央アジアではカウフマンによって清国領土に対する掠奪的行為が惹起され、わずか十年の間に二度も釈明をしなければならない立場に追い込まれたのだった。

（つづく）

ソ連便り

8月1日～31日

1日 ▽東京の原水禁83年世界大会、中国代表が米ソの核軍拡競争を厳しく批判

2日 ▽ジュネーブでのＳＴＡＲＴ、10月5日まで夏休み入りを決定

▽シュルツ米国務長官ら、石油・天然ガス機器の対ソ輸出規制緩和を大統領に勧告

▽ソ連貨物船ウリヤノフ、先月30日ニカラグア沖で米駆逐艦に停船を命じられたと発表

3日 ▽プラウダ、米国の中米への砲艦外交を非難

▽中国外務省、ソ連のカピッツァ外務次官を招請したと表明

▽スウェーデン国防研究所、今年上半期にソ連カザフ共和国で13回地下核実験と発表

4日 ▽ラジオアナウンサー、ユリ・レビタン氏死去、68歳（タス）

▽「中央集権が経済を阻害」との秘密報告書、ソ連指導部内に配布（Ｎ・Ｙタイムズ）

5日 ▽チャドのファヤラルジョ北西、反政府軍基地にソ連製Ｔ62・72戦車が多数集結

7日 ▽ソ連各紙、〝労働規律是正と報奨拡大〟の党中央委、閣僚会議の合同決議を掲載

8日 ▽ベトナムのタク外相、ソ連海軍のカムラン湾使用を確認（マレーのベルナマ通信）

9日 ▽リビア軍事代表団、ソ連当局者と会談

10日 ▽カピッツァ外務次官の訪中、9月8日から16日までと決る

▽タス、チャド情勢で米仏介入を新植民地主義と非難

▽駐米ソ連大使館員の息子アンドレイ君（16）Ｎ・Ｙタイムズに亡命希望と手紙

▽アルバトフ米国カナダ研所長、ＩＮＦ決裂ならＳＴＡＲＴも停止と示唆（国営ＴＶ）

▽ソ連原潜、6月にカムチャッカのペトロパブロフスク基地沖で沈没（米ＣＢＳ）

▽ソ連の上半期対西側貿易、蘭29％増、英、仏、伊10％以上増、米42％減、日本も15％減（エコノミチェスカヤ・ガゼータ紙）

11日 ▽モスクワ放送、安倍外相の北方領土視察を反ソ・キャンペーンと批判

▽ソ連外務省、中米海域での米海軍によるソ連商船臨検に抗議

▽米国防総省、カムチャッカでのソ連原潜沈没を確認

12日 ▽党政治局、肥料生産の計画の遅れでペトリシチェフ化学肥料生産相に厳重警告

▽米政府、ソ連が新型大陸間誘導弾の実験等でＳＡＬＴ違反と11日緊急査察委開催を要求（Ｎ・Ｙタイムズ紙）

13日 ▽サリュート7号の宇宙飛行士、パミールの氷河が解け洪水と災害を警告（プラウダ）

▽安倍外相、モスクワ空港でカピッツァ外務次官と会談、秋に日ソ外相会談で合意

▽米政府、アンドレイ君の亡命希望問題で、ＦＢＩ要員を空港に配置、米ソ外交対立へ

15日 ▽アンドロポフ書記長、積年の弊で経済目標達成が至難と演説（党中央委の会合で）

▽ラオスにミグ21戦闘爆撃機34機をすでに配備（バンコク・ポスト紙）

▽ソ連軍中佐、チャド北部の航空基地で軍事指導（米ＣＢＳテレビ）

▽トルード紙、ソ連初等学校で9月から性教育を必修科目として導入と報道

16日 ▽アフガン・ゲリラ、13日夜カブールでソ連軍と79年侵攻以来最大の激戦と判明

▽外国貿易省、10月初旬モスクワで2年半ぶりに日ソ貿易協議を開催と同意

17日 ▽バイバコフ国家計画委議長、西側に流布の経済改革秘密報告書は間違いと記者会見

▽アンドロポフ書記長、米ＡＦＬ―ＣＩＯのウィンピシンガー副議長と会見

▽西独のドレッガー与党院内総務、パーシングⅡの配備断念は誤りと首相に警告

18日
▽アンドロポフ書記長、ソ連は衛星攻撃兵器の配置を一方的に凍結と言明（米民主党訪ソ上院議員団との会談で）
▽アンドレイ・ベレシコフ君、〝亡命希望〟の手紙はニセ〟と記者会見で語り帰国

19日
▽トラペズニコフ党中央委科学・教育部長を解任、後任にワジム・メドベージェフ氏
▽中国へのソ連観光客、今年上半期は昨年同期の66％増（北京放送）
▽モスクワの英大使館に手製爆弾を持った30代の男が乗用車で侵入、警備当局が連行
▽米国務省、ソ連の宇宙兵器凍結案に疑念を表明、慎重に対処と警戒
▽「アラル海の水が急速に干上がりつつある」と報道（モスクワ・ニューズ紙）

20日
▽米ソ、偶発核戦争防止のためホットライン強化を協議（ワシントン・ポスト紙）
▽米商務省、石油・天然ガス・パイプライン敷設機械の対ソ輸出規制を撤廃と発表

21日
▽グロムイコ外相、国連総会に衛星兵器禁止条約案を提出と事務総長に書簡（タス）
▽ベルギー政府、産業スパイ事件でソ連一等書記官1人を国外追放
▽モザンビークのゲリラMNR、モルア鉱山を襲撃、ソ連人技師2人殺害、24人を人質（フランクフルター・アルゲマイネ紙）
▽モスクワの第4回国際図書展（9月6～12日）に中国が初参加（新華社通信）
▽58年版日本の防衛白書、ソ連の脅威を強調

22日
▽ルーマニアのチャウシェスク大統領、「INF合意がなくても核配備自重を」と米ソ首脳に親書（アジェルプレス通信）
▽ワインバーガー米国防長官、谷川防衛庁長官と会談、《対ソ認識》で同調
▽モスクワ放送、ワインバーガー・谷川会談は反ソ的と非難
▽チェコ南部のピセクで69年以来の反ソデモ
▽ソ連最高裁、ソ連人A・イワノフに米GIAのスパイとして長期懲役刑判決

24日
▽ブロック米農務長官、モスクワ入り
▽英国際戦略研、米国がソ連に核攻撃を加えたら2千500万～3千400万人死亡と推定
▽東独ホーネッカー党書記長、西欧が中距離核を配備すれば東側はソ連巡航ミサイルを展開と警告（西独社民党バール議員に）
▽西独の核専門家トーデンヘファー氏、ソ連は2年以内に新巡航ミサイルを配備と言明
▽国連人権小委のソ連代表、サハリン残留朝鮮人問題に日本の容喙を拒否

25日
▽パトリチェフ外国貿易相とブロック米農務長官、米ソ穀物協定に調印

26日
▽アンドロポフ書記長、INF合意ならSS20を極東に移転せず廃棄と言明（タス）
▽ソ連、昨年6月西独上空で迎撃衛星の実験

27日
▽中国の呉外相、アンドロポフ発言の対中政策に変化なしと批判（日本国会議員団に）
▽日本外務省、日ソ文化交流拡大を決定

28日
▽党中央委、閣僚会議、科学技術振興に賞金制も導入、立遅れ克服を決定（プラウダ）
▽グロムイコ第一副首相、9月上旬に訪仏

29日
▽イタリア共産党ベルリングエル書記長、中ソ関係正常化を要望（北京での記者会見）
▽米国務省、9月7日からシュルツ国務長官がマドリードでグロムイコ外相と会談すると発表
▽アンドロポフ書記長、西側首脳に書簡を送りSS20廃棄案に前向きの対応を要請

30日
▽プラウダ、ベギン・イスラエル首相の辞任を論評、米国の中東政策破産を強調
▽最高会議幹部会、白ロシア農業の遅れを指摘、活動強化を勧告
▽ミグ23、択捉島に飛来（防衛庁発表）

編集後記

◆乗員、乗客二百六十九人を乗せた大韓航空機がアンカレジからソウルに向う途中、ソ連領空を侵犯しミグ23戦闘機のミサイル攻撃を受け、サハリン西方、海馬島付近の海へ撃墜されるというきわめてショッキングな事件が起った。勿論、全員死亡と推定され、中には日本人乗客も二十八人含まれている。五年前〝同じ大韓航空機がパリからアンカレジへ飛ぶ途中、やはり航路を誤ってソ連領に迷い込み、いきなり発砲され、この時も日本人乗客一人が死亡している。航空専門家にいわせると、常識ではとても考えられない航路ミスで、それが大韓航空に限って再発したのも謎ではある。とはいえ、非武装の民間機撃墜というこんどの事件が明白な国際法違反で断固糾弾さるべきものであることはまぎれもない。国連緊急安保理も招集され、米、日、韓三国を中心に厳しいソ連弾劾が行われた。◆日米両国はその優れた電波傍受能力によって緊急発進したミグと地上基地の交信内容を解折した上で、ソ連の責任を追及している。だが、ソ連側の対応は事実を隠蔽しようとしているためまことに歯切れが悪くすっきりしない。安保理席上でのオビニコフ代表のパイプをくゆらせながらの横着な態度は満場の眉をひそめさせた。タスの発表に至っては民間旅客機をまるでスパイ扱いするなど全く論外だ。しかし、こうまで居直ってはとても損害賠償どころか謝罪もしないだろう。ソ連領海内に日本の巡視船はノれないし、証拠の品々は彼らが回収して闇に葬ってしまうにちがいない。となれば、最後まで知らぬ存ぜぬで押し通すことになるかも知れない。何とも付き合いにくい相手ではある。国連のリチェンスタイン米国代表が、ソルジェニーツィンの言葉を引用していた。**「暴力はいつも嘘と対になっている」**と。◆ところで、この撃墜はどこの指令によるものなのか？発進したミグはドリンスク・ソーコル基地の防空軍のものらしいが、撃墜命令はハバロフスク極東軍管区司令部またはチタの極東戦域軍総司令部からと推定されている。それがクレムリンの許可を得ていたかどうか？　党・軍の対立があったのでは？　アンドロポフ不在説、米軍偵察機との誤認説等々が取沙汰されている。だが、アンドロポフ指導部下でスターリン時代を凌ぐほどの「国境法」が制定された背景を考えれば、党も軍もない。党・軍一体で起るべくして起ったものといわざるを得ない。五年前の大韓航空機事件の後、ムルマンスク方面の防空軍責任者はあまりに深く領空を犯された責任を問われ《射殺》されたという。今回もサハリン領空から日本海に出てしまっては、迎撃体制の不手際で処罰されるとの判断が軍当局にはあっただろう。

昭和五十八年九月二十日
印刷、発行
編集発行人　筑紫匡彦
発行所　自由ロシア・クラブ
＊本紙の掲載記事は無断転載を禁じます。